

北上川流域における縄文時代 前期環状集落に関する研究

A Study of Circular Settlements of the Early Jomon Period
in the Kitakami River Basin

菅野智則

KANNO Tomonori

はじめに

- ①初期の環状集落遺跡
- ②周辺地域における前期前半期の集落遺跡
- ③前期後半期の環状集落遺跡
- ④北上川支流域における前期後半の集落遺跡
- ⑤前期における集落遺跡の変遷

【論文要旨】

本論は、北上川流域において長方形大型住居跡により構成された前期環状集落に関して、その特徴を明らかにすることを目的とした。このような集落遺跡の最初期となる岩手県綾織新田遺跡の事例では、大木2b式～大木4式期の長方形大型住居跡が、北列と南列に各時期数軒ずつ存在し、それが時期とともに広がり放射状になる様相が見受けられた。三陸沿岸部と北上山地内のほかの同時期の集落遺跡では、長方形大型住居跡は等高線に沿って配置されており環状構成とはならない。北上川流域では、類似する集落遺跡が大木3～4式期の岩手県蟹沢館遺跡において認められる。この遺跡では、長方形大型住居跡が放射状ではなく完全な環状配置となっている。また、この住居跡は、北上山地地域と三陸沿岸部のものとは全く形態が異なっている。

大木5a式期では岩手県大清水上遺跡において、多数の長方形大型住居跡による環状配置が認められる。その住居跡の形態には、床面に段を有する長方形大型住居跡が確認された。この形態は、日本海側の円筒土器分布圏の住居跡の特徴とされている。この大清水上遺跡が立地する地点は、奥羽山脈から日本海側へと抜ける胆沢川沿いに位置しており、日本海側の円筒土器分布圏の文化と接するのに適した場所であると考えられる。大木6式期には、北上川中流域に集落遺跡が多数認められるが、大清水上遺跡では住居跡が激減し、和賀川流域の峠山牧場I遺跡では環状集落遺跡が形成される。このことは、日本海側との回廊的役割の主体が胆沢川から和賀川流域の方に移ったことによるものと解釈した。

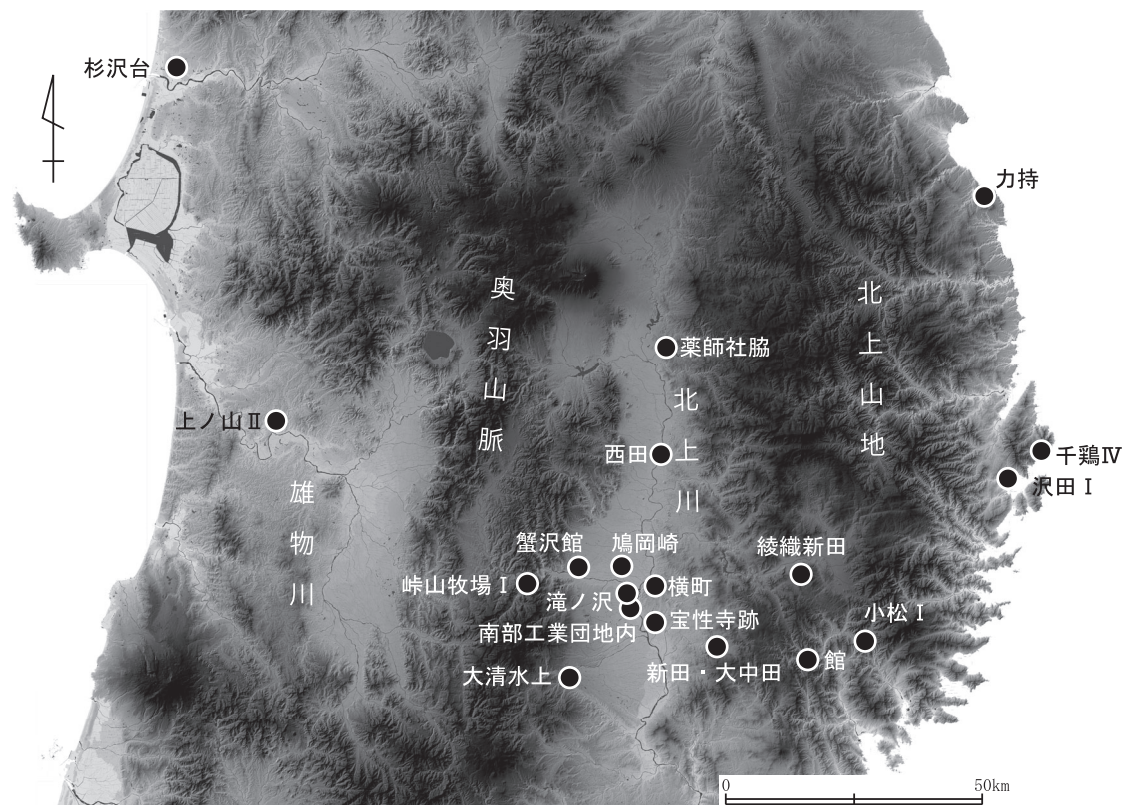
これらの環状集落遺跡の特徴は、必ずしも相似するわけではなく、遺跡ごとの個別的特徴の方が目立つ。今後、環状集落遺跡の形成要因の解明については、その他の遺構や遺物等の検討を踏まえ、遺跡・地域ごとの脈絡の上でその形成過程を検討する必要がある。

【キーワード】 縄文時代前期、長方形大型住居跡、環状集落、東北地方

はじめに

北上川流域では、前期前半において、長軸方向がとくに長い竪穴住居跡により構成された環状に近い構成となる集落遺跡が出現する。この大型住居跡の形状は、長方形や楕円形などの形が認められるが、本論では、ひとまず「長方形大型住居跡」とまとめて表現する。岩手県遠野市綾織新田遺跡〔小向・佐藤 2002〕⁽¹⁾では、大木 2b 式期から大木 4 式期の長方形大型住居跡が存在する（第 2 図）。別稿では、完全な環状ではないにせよ「求心性を有した集落構成」と評価した〔菅野 2015〕。このような配置関係について、小林克・小島朋夏両氏は 2 列向い合って並列する「並列配置」であることを指摘している〔小林・小島 2001〕。そして、求心性を有するものを「放射状配列」と呼称している。

北上川流域における前期以前の集落遺跡には、このような環状に近い構成の集落遺跡は認められず、竪穴住居跡は散漫な分布状況を示す。例えば岩手県盛岡市薬師社脇遺跡〔神原 2008〕や住田町小松 I 遺跡〔吉田 2004〕等の早期後半の集落遺跡では、10 軒程度の竪穴住居跡が発見されているが、環状等の何らかの配置関係となるようなものではない。当地域では、この綾織新田遺跡が環状に近い構成となる集落遺跡の中では最初期のものと考えられる。本論では、この北上川流域における最初期の環状集落遺跡の分析から、その特徴を明らかにし、北上川中流域において認められる環状構成となる前期の集落遺跡の特徴について検討したい（第 1 図）。



第1図 本論と関連する遺跡の分布
(数値地図の50mメッシュ(標高)と25000(地図画像)を用いてカシミール3Dにて作図)

なお、小林圭一氏は、この地域に関して円筒土器分布圏と大木式土器分布圏の中間地帯に位置する「緩衝地帯」として指摘している[小林・菅原 2009]。さらに、宮城県栗原市嘉倉貝塚[天野ほか 2003, 佐藤・三好 2003]等の事例を挙げ、前期末葉には類似する集落構成がより南方で認められることから、「緩衝地帯」の影響の南下を指摘している。

長方形大型住居跡を含めた大型住居跡については、鈴木克彦氏がその研究史や定義、機能に関する問題等をまとめている[鈴木 2011]。鈴木氏は大型住居跡の定義を「標準住居に対し面積が大きく広い住居」と簡潔にまとめ、面積と長軸を一つの目安としている。そして、「円形、矩形共に面積 30㎡以上、直径、長軸ともに 6m 以上」を大型住居、「面積 80-90㎡ (100㎡前後) 以上、直径 10m、長軸 15m 以上」を超大型住居としている。本論では、そのような値を参考としつつ、個々の遺跡の事例から判断する。

①……………初期の環状集落遺跡 —綾織新田遺跡の特徴—

綾織新田遺跡は、標高 210～220m 程の猿ヶ石川左岸の高位段丘上の頂部のやや平坦な面に位置する。この段丘の西側には新田沢が北流し、猿ヶ石川に合流している。この場所は、北上山地内の遠野盆地西部付近にあたる。前期集落が発見された区域は 1998～2000 年に調査がなされ、その重要性から保存が決定し、2002 年には国指定史跡となった。

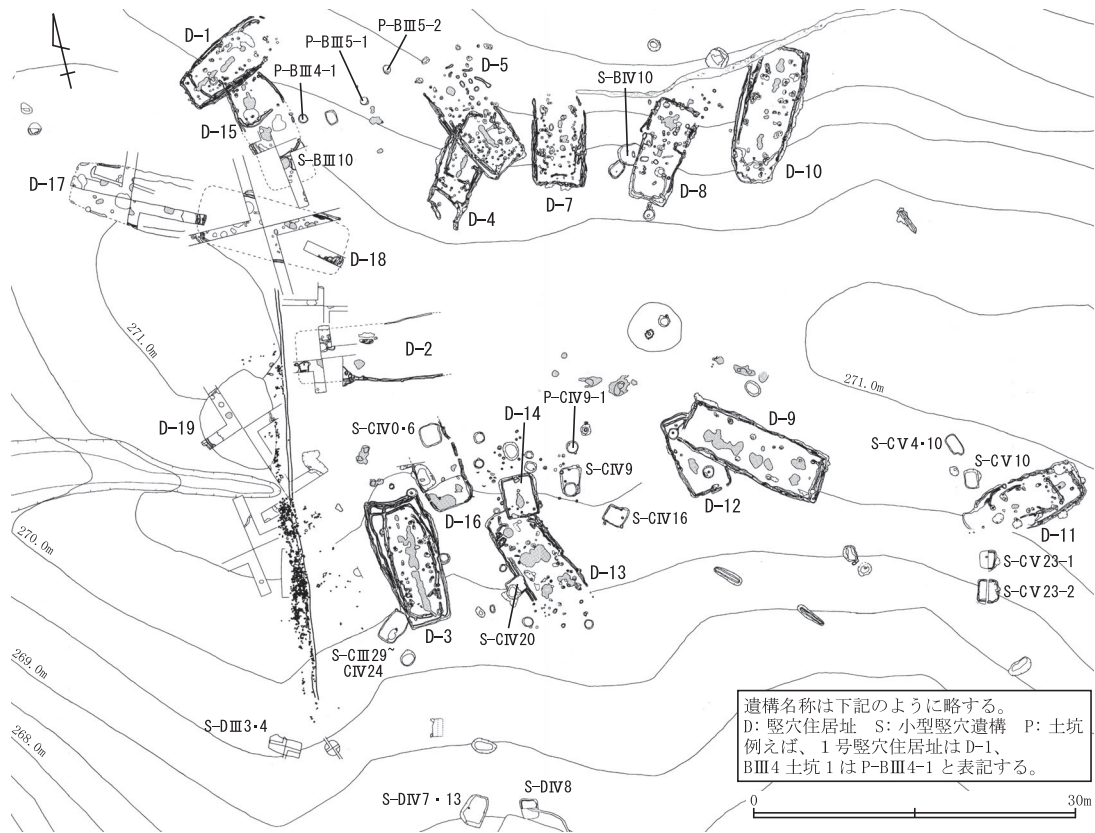
(1) 時期と配置関係

綾織新田遺跡では、竪穴住居跡 20 軒が報告されている(第 2 図)。これらのうち、報告者が大木 2b 式～大木 3 式期に帰属すると指摘する「第 1 グループ」(1・3・12～15・17 号竪穴住居址)の竪穴住居跡 7 軒は、埋土に基本層序Ⅲ層の黒色土を含まず、中振火山灰を含む一群である。この中振火山灰は、大木 2b 式期中に降下したものと考えられている[星・須原 2004]。

この第 1 グループの 15 号竪穴住居址では、二次堆積した中振火山灰が壁際に確認されている。そして、大木 3 式土器が埋土から出土している。本遺跡では大木 1・2a 式土器の存在は希薄であることから、本住居跡を大木 2b 式期の遺構と推定する。それに重複し新しい 1 号竪穴住居址は、埋土に中振火山灰を含むとされているが、その堆積状況は明確ではない。床面出土土器の存在等を含めて考えるならば、この住居跡は大木 3 式期の遺構と推定できる。そのほかには、これらの 1・15 号竪穴住居址の南西側に位置する 17 号竪穴住居址では、一次堆積とされる火山灰が面的に広がって堆積していることから、大木 2b 式期の遺構として推定した。

南側に位置する 13 号竪穴住居址より新しいやや小型の 14 号竪穴住居址(第 3 図④)でも、埋土中位の壁よりに火山灰が混じる二次堆積層が確認できる。13 号竪穴住居址では、中振火山灰の記載は確認できないが、周溝埋土から大木 2b 式土器が出土している。それらの関係から、13・14 号竪穴住居址を大木 2b 式期として推定する。

第 1 グループのほかの住居跡には、12 号竪穴住居址がある。この住居跡では、壁際に火山灰が堆積し、埋土下位から大木 3 式土器破片が出土している。この状況は 15 号竪穴住居址と類似するものと捉え、大木 2b 式期と比定する。そのほかには 3 号竪穴住居址(第 3 図①)があるが、この住居跡の時期は判然としない。



第2図 綾織新田遺跡の主要遺構の配置図(小向・佐藤2002を元に改変)

大木3式期の竪穴住居跡は、報告者が「第2グループ」(大木3式~大木4式期)と分類した住居跡(2・4・5・7・11・16号竪穴住居址)にも含まれている。16号竪穴住居址では埋土に火山灰が混ざらず、大木2b式・大木3式土器破片が出土していることから、大木3式期の遺構と比定した。ほかの第2グループの竪穴住居跡に関しては、出土遺物も少なく細かな時期比定は難しい。

大木2b式期の竪穴住居跡は、北側に15・17号竪穴住居址、南側に12・13・14号竪穴住居址が対向するように位置する。大木3式期には、北側に1号竪穴住居址、南側に16号竪穴住居址が位置する。1号竪穴住居址の長軸方向は別の方向を向いているが、竪穴住居跡がそれぞれ北側と南側に対向するように1~3軒位置することになる。

大木4式期の竪穴住居跡には、報告者が「第3グループ」とする4軒の住居跡がある(8~10, 18号竪穴住居址)。これらの竪穴住居跡の埋土には中振火山灰は含まれていない。8・10号竪穴住居址は、床面出土土器からも該期のものと推定できる。これらの竪穴住居跡の配置関係は、北東側に2軒、北西側に1軒、南東側に2軒となる。大きくまとめれば、北側に3軒、南側に2軒となる。

なお、「第2グループ」のうち4・5・7・11号竪穴住居址は、詳細な時期は決めがたいが、出土遺物などからも大木3~4式期の間に含まれるものと推定できる。そう考えると、大木3~4式期の一時期の竪穴住居跡数は、2軒程度ずつ増える可能性はある。

このように時期別の配置状況を見るならば、綾織新田遺跡では各時期に数軒程度の竪穴住居跡が対向して位置する様子が窺える。完全な環状構成となるためには、東側にも竪穴住居跡が配置され

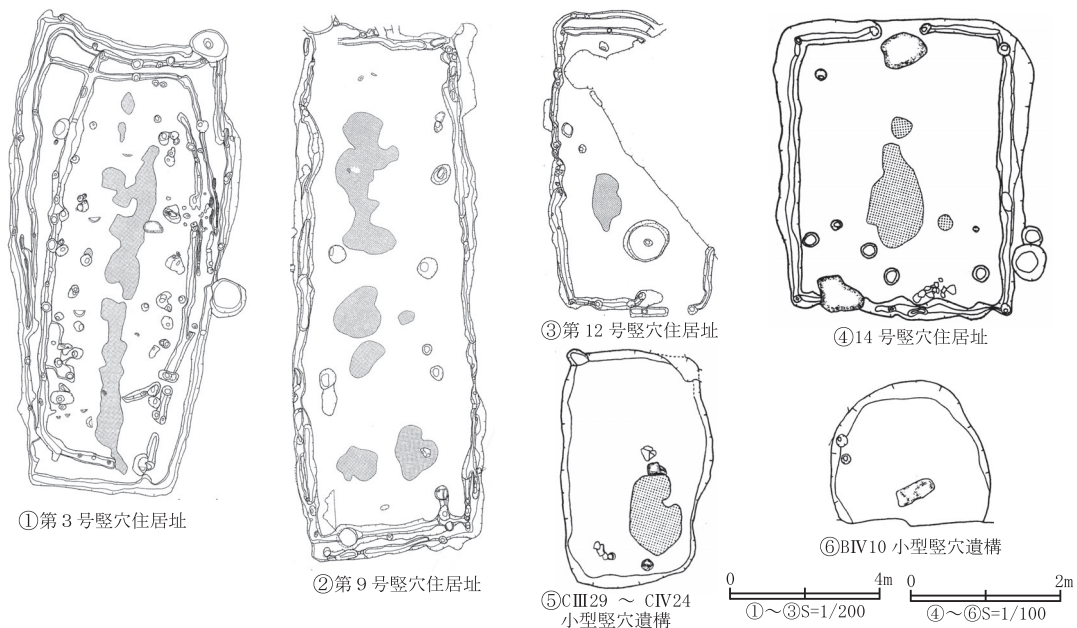
る必要があるが、空白地となっている。西側は、確認調査のため詳細不明であるが、2号竪穴住居址が位置する。この竪穴住居跡の埋土上層からは、大木5式土器が出土しているという記載があるが、その資料は未掲載であるため判断はできない。この2号竪穴住居址の存在から確実なことは判断できないが、現在の状況からすると、北列と南列の2列に竪穴住居跡が配置される構成となる。長軸方向が中心を向いていない1号竪穴住居址や、やや分布が離れる11号竪穴住居址のような例外はあるが、基本的には中心部の方に長軸方向を向けることにより、求心性を有するような構成になったものと考えられる。

(2) 長方形大型住居跡の形態と規模

形状から長方形大型住居跡と認識できる前期の竪穴住居跡は、1～5, 7～13, 15～18号竪穴住居址の15軒である。これらの長方形大型住居跡は、周溝が周囲に巡り、中央部に地床炉が並び、柱は左右に二列並ぶ。周溝はおおむね全周を巡り、その形状はほぼ長方形となる(第3図①)。この周溝内には小さな柱穴が認められる場合があるが、無い箇所もあり、必ずしも連続しているわけではない。また、9号竪穴住居址の断面図から確認できるように、壁は周溝部から立ち上がる。このような壁が確認できない場合もあるが、それが削平によるものか不明である。これらの竪穴住居跡には、複数の周溝や柱穴が認められることから、拡張等が行われていたことがわかる(第3図②)。

また、長方形大型住居跡ではない14号竪穴住居址は、ほぼ方形となる竪穴住居跡であり、炉跡は地床炉である(第3図④)。また、部分的な調査のため正確なところは不明であるが、19号竪穴住居址は楕円形の竪穴住居跡となる可能性がある。

規模が計測できた竪穴住居跡は9軒である。これらの長方形大型住居跡の計測値は、長軸最低値が8.2m、長軸と短軸の比は2.0以上、面積は25㎡以上となる。本論では、長方形大型住居跡の基準



第3図 綾織新田遺跡の遺構(小向・佐藤2002を元に改変)

をおおむねこの値とする。やや小型の4・12号竪穴住居址は、何れかの数値が下回る。拡張を行っている竪穴住居跡に関しては、1・5・10号竪穴住居址で2回、3号竪穴住居址で4回の拡張後の規模が計測できた。3号竪穴住居址の規模は26.4㎡から最終的に54.3㎡となり、当初の規模から2倍近くになっている(第3図②)。短軸の拡張された長さは0.3～1m、同様に長軸の拡張された長さは0.4～2.8mとなり、長軸方向を拡張して大型化する傾向がある。

12号竪穴住居址の規模は24.9㎡、長軸／短軸比は1.9であり、やや小さい(第3図③)。この値は1・3号竪穴住居址の拡張前の最初期の規模とほぼ同じである。4号竪穴住居址は、拡張後の規模は計測できなかったが、残存部位から長軸と短軸の比が2.2程度となることはわかる。この住居跡の形状や長軸と短軸の比からすると、この竪穴住居跡も、拡張を何度か繰り返すことにより、長方形大型住居跡の規模となる可能性はあったものと考えられる。

綾織新田遺跡の長方形大型住居跡には、当初から規模の大きな長方形大型住居跡が構築される場合と、やや小型の長方形の竪穴住居跡から、長軸方向に拡張を繰り返して大型化する場合がある。そして、後者の場合、当初の規模は小さいが、長方形の形状を呈し、長軸と短軸の比率が2に近い値を示し、周溝と炉を有することなど、長方形大型住居跡とほぼ同様の特徴を有している。そして、拡張をせずに、そのまま廃絶される住居も存在する。一方、それらとは異なり、かなり小型でほぼ方形の竪穴住居跡も存在する(14号竪穴住居址：規模9.2㎡)。この竪穴住居跡も、柱配置は不定ではあるが、壁際に周溝、中央部に炉を有してあり、長方形大型住居跡と同様の構造を有している。このような竪穴住居跡も、拡張を繰り返し大型化する可能性もあるが、類例がないため不明である。

(3) 小型の竪穴遺構

そのほかの特徴的な遺構としては、小型で柱穴等があまり認められない「小型竪穴遺構」がある⁽²⁾。その形状は、長方形あるいは方形が主体となるが、円形のものもある。方形のものには、壁際に周溝あるいは壁柱穴を有するものがあり、確かに竪穴建物であることが窺える遺構が6基ある。ただし、これらの遺構からの出土遺物はほぼ無いので、帰属時期については決めがたい。

これらの遺構の規模は、1.5㎡(CV10小型竪穴遺構)～4.6㎡(CⅢ29～CⅣ24小型竪穴遺構：第3図⑤)となり、平均値は2.9㎡となる。この規模は、竪穴住居跡の中で比較的小型の14号竪穴住居址(第3図④)が9.2㎡であることと比較すると、かなり小さい。長方形あるいは方形のものに関しては、長軸と短軸の比が1～2.1となる。CV4・10小型竪穴遺構については、その比は2を越えているが、面積は3.8㎡と小さい。

円形のBⅣ10小型竪穴遺構(第3図⑥：3.3㎡)、長方形で炉跡を有するCⅢ29～CⅣ24小型竪穴遺構(第3図⑤：4.6㎡)に関しては、報告者は「小規模作業施設」と推定している[小向・佐藤2002：p.63]。その他の方形の周溝等を有する小型竪穴遺構も、類似する機能を有している可能性はあるが、確実では無い。

これらの小竪穴遺構は、南側に多く分布する。長方形大型住居跡と重複することもあるが、よりその外側に位置しているように見受けられる。

(4) 土坑

検出された土坑38基のうち、貯蔵穴と推定されるビーカーあるいはフラスコ型の土坑は21基あ

る。長方形大型住居跡の数からすると、貯蔵穴の数が少ない印象を受ける。出土遺物はほぼ確認されていないが、火山灰の堆積状況から、北西に位置する3基の貯蔵穴（BⅢ4土坑1、BⅢ5土坑1、BⅢ5土坑2：第2図）は、大木2b式期の遺構として推定できる。また、西側に隣接して同時期の15号竪穴住居跡が存在していることから、これらの貯蔵穴はその竪穴住居跡の傍らに構築されていた可能性が高い。そのほかの貯蔵穴は、南側中央部に分布する。その時期は不明であるが、北西の3基のあり方からすると、少数の貯蔵穴が竪穴住居に近接して設置されていたものと推察される。

また、これらのうち中央部に近い場所に位置する1基（CⅣ9土坑1）の底面からは、赤色顔料が確認されており、墓として利用された可能性もある。綾織新田遺跡では、明確な墓は検出されていない。このような貯蔵穴のような形態を持つものが墓であった可能性もあるが、不明である。なお、その他の土坑17基の機能も不明である。

(5) 初期の環状集落遺跡の特徴

これまで、綾織新田遺跡に関する検討を行った。その特徴は、以下のようにまとめられる。

①竪穴住居跡の分布状況

最初の大木2b式期の長方形大型住居跡は、対向するように北西側と南西側に位置する。大木3式期以降の竪穴住居跡は、北側と南側において東西に広がるようになるが、中央部には進出しな。結果として、長方形大型住居跡は北列と南列の2列に並び、それぞれ長軸方向を中心に向けることにより環状構成に近い構成となる。

②長方形大型住居跡の形態

綾織新田遺跡の事例からは、長軸最低値8.2m、長軸と短軸の比2.0以上、面積25㎡以上を長方形大型住居跡と認識できる。これらの竪穴住居跡は、長軸方向に拡張をすることにより大型化するものと、当初より規模の大きなものの二種が存在する。また、これらの基準には当てはまらないが、長方形で周溝と地床炉を有し、長方形大型住居跡と構造上は変わらない小型のものも存在する。

③その他の遺構

貯蔵穴は竪穴住居跡の傍に位置する。墓の存在は明瞭ではない。小型方形竪穴遺構は、南側に多く分布する。その機能は、作業施設である可能性もあるが不明である。

このような綾織新田遺跡の特徴と類似する集落構造を有する同時期の集落遺跡は、現在のところ確認されていない。以下では、このような特徴を踏まえ、その他の同時期の長方形大型住居跡を有する集落遺跡に関して比較検討する。

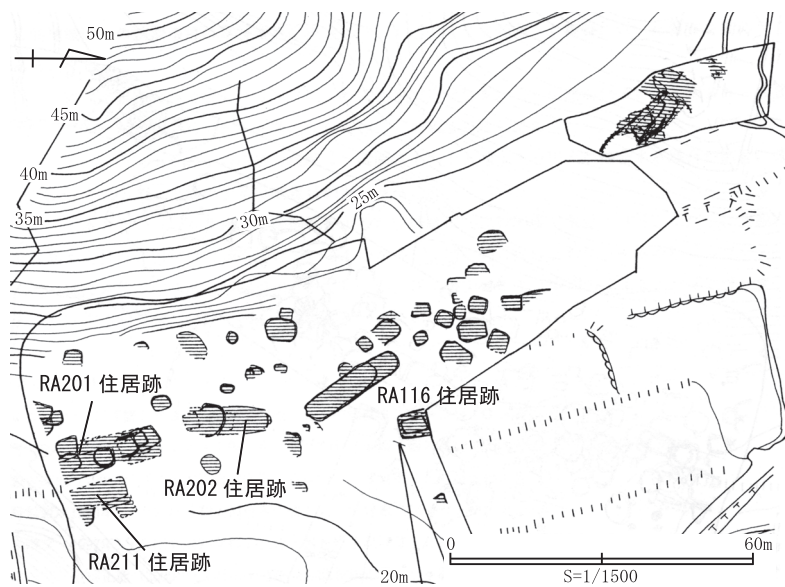
②……………周辺地域における前期前半期の集落遺跡

(1) 三陸沿岸部の遺跡

同時期の長方形大型住居跡を有する集落遺跡としては、1994年から5次の調査が行われた三陸沿岸部の山田町沢田I遺跡がある〔佐々木ほか2000、星・前田2000〕。この遺跡は、山田湾に向かって伸びる尾根の東側緩斜面に位置し、前期と中期を主体とする竪穴住居跡148軒が検出された大規模

な集落遺跡である。

報告者の時期比定に基づくと大木1～2b式期の竪穴住居跡は80軒となる〔星・前田2000:p.102〕。これらの中には、埋土に中振火山灰を含む竪穴住居跡もある。長方形大型住居跡と考えられる住居跡は11軒ある。これらの竪穴住居跡は重複が著しく、すでに削平も受けているものもあり、時期の決定は容易ではない。これらのうち中振火山灰のあり方、重複関係、床面出土遺物等の特徴から、計測できた3軒（RA116・201・202住居跡）に関しては、大木2b式期に相当するものと推定した。長方形大型住居跡を含むこれらの竪穴住居跡は、等高線に沿って列状に配置されているもので、環状構成とはならない（第4図）。



第4図 沢田 I 遺跡における前期の遺構配置(星・前田2000を元に改変)

て、ほぼc・d期を合わせた範囲。4期は、e期と同じで全体的に拡張を行った時期とする。当初の1期の規模は、23.7㎡で、長軸・短軸比は2.5となる。これらの値は、綾織新田遺跡の1・3号竪穴住居跡とほぼ同規模である。最後の4期には、その規模は82.6㎡となり、綾織新田遺跡の最大規模の竪穴住居跡より大きくなる。

RA202住居跡にも、3期の変遷が見受けられるが、遺存状態は良くない。北側に部分的に残っている最も内側の周溝部分が古段階となり、その後全体的に拡張されたものと考えられる。規模については南端部が不明なため、推定値ではあるが、最終的にはRA116住居跡の4期と同程度の、かなり大規模な長方形大型住居跡となったものと推定できる。RA201住居跡は、拡張などの痕跡はない（第5図②）。この住居跡も南側が不明なため推定値となり、確実ではないが、RA116住居跡の2期と同程度の規模であったと推定できる。

そのほか規模は不明であるが長方形大型住居跡と推定される住居跡としては、周溝が確認されているRA211・p97住居跡3号の2軒がある。RA211住居跡（大木2b式期：第5図③）は、おそらくRA116住居跡と類似する構造になるものと考えられる。p97住居跡3号（詳細時期不明）は、南端部がどのように伸びるかは不明ではあるが、規模が大きい竪穴住居跡となることは間違いがない。

RA116住居跡（第5図①）に関しては、報告者によってa～e期の5期に分けられている（第5図③）。その中で、a・b期は南北に別々の2軒として分けられているが、本論では拡張という観点から1～4期に再度分類したい。1期は、南側の小規模な竪穴住居跡（b期）。2期は、そこから北側への拡張を行う（a+b期）。3期は、東側以外に拡張を行った時期とし

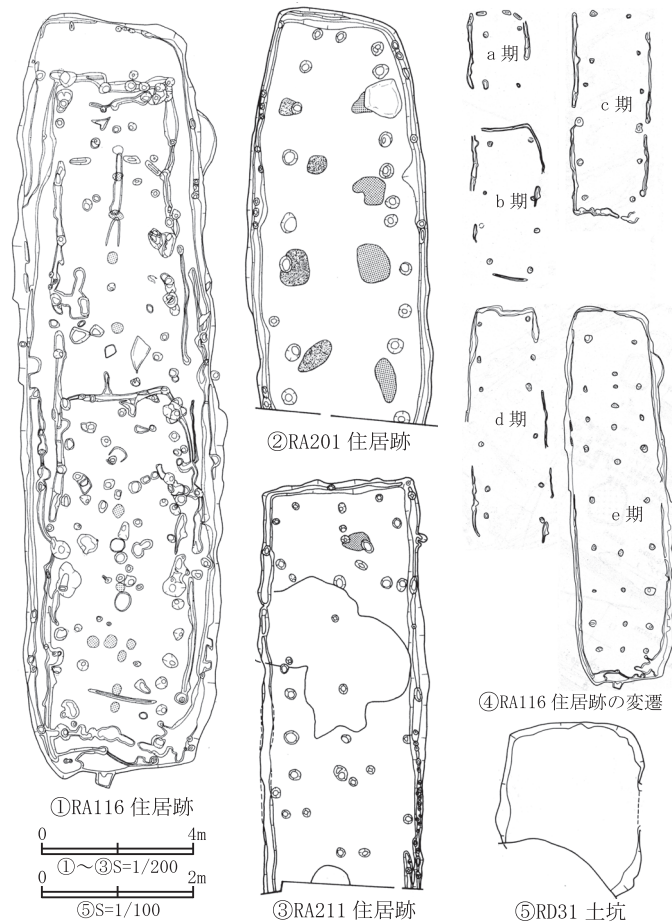
その他の報告者によって大型住居跡と指摘されている遺構は、遺存状況が良くはなく、柱穴が巡ることが確認されているのみの事例が多い。

沢田 I 遺跡における前期の土坑は 16 基のみであり、さらに前期前葉と推定される土坑は 8 基である (RD 31・37・41・49・51・52・58・112 土坑)。そのうち RD112 土坑は粘土採掘坑と考えられるが、その他の土坑で機能が明確なものは多くはなく、円形の RD41・49 土坑が貯蔵穴と推定される程度である。ただし、大型の土坑として報告されている方形の RD31 土坑 (第 5 図⑤) の規模は 3.2m²あり、綾織新田遺跡の小形竪穴遺構と同規模程度である。形状・規模からすると、この土坑は小型竪穴遺構と同機能の遺構である可能性もある。

これらの様相から、報告者も指摘するように、竪穴住居跡以外の遺構

が少ないことが沢田 I 遺跡の特徴の一つとして捉えられるが、多くはない貯蔵穴、明確な墓の不在、小形竪穴遺構の存在からすると、綾織新田遺跡と遺構の構成は類似している。異なる点は、沢田 I 遺跡には通常規模の竪穴住居跡が存在していること、遺構が環状構成とならないことが挙げられる。

沢田 I 遺跡に類似する集落遺跡としては、北に 60km 程度ほど離れた普代町に力持遺跡がある [星 2008]。この遺跡は、円筒土器が主体となる時期もあり、必ずしも大木式土器分布圏の遺跡ではない [星 2006]。そして、前期前葉の土器に関しても、必ずしも大木 2 式とは言えない地域色ある土器が多く認められる [星 2008:p.548]。その中で、報告者の推定する大木 2a 式～大木 2b 式期の竪穴住居跡は、合計で 46 軒である。これらの中にも通常規模の竪穴住居跡が認められ、長方形大型住居跡は列状の配置となる。一方で、貯蔵穴と推定される土坑が多く、小形方形竪穴遺構が無いことは沢田 I 遺跡とは異なっている。また、墓と積極的に推定される遺構は認められず、報告者は貯蔵穴を土坑墓へと転用した可能性も指摘している [星 2008: pp.545-546]。その他に長方形大型住居跡がある遺跡としては、宮古市千鶏 IV 遺跡がある [阿部 1999]。この遺跡では、大木 4 式期の長方形大型住居跡 (D-7 号竪穴住居跡: 最大 39.8m²) の 1 軒のみが検出されているが、そのほかの遺構の構成等は不明である。この住居跡が発見された調査区は、緩やかな緩斜面部に位置している。長方形大型住居跡は、長軸方向を等高線と平行するような形で位置しているものと考えられる。遺構配置や、その



第5図 沢田 I 遺跡の遺構 (佐々木ほか2000を元に改変)

他の遺構等不明ではあるが、沢田 I 遺跡と類似するあり方となることが推測される。

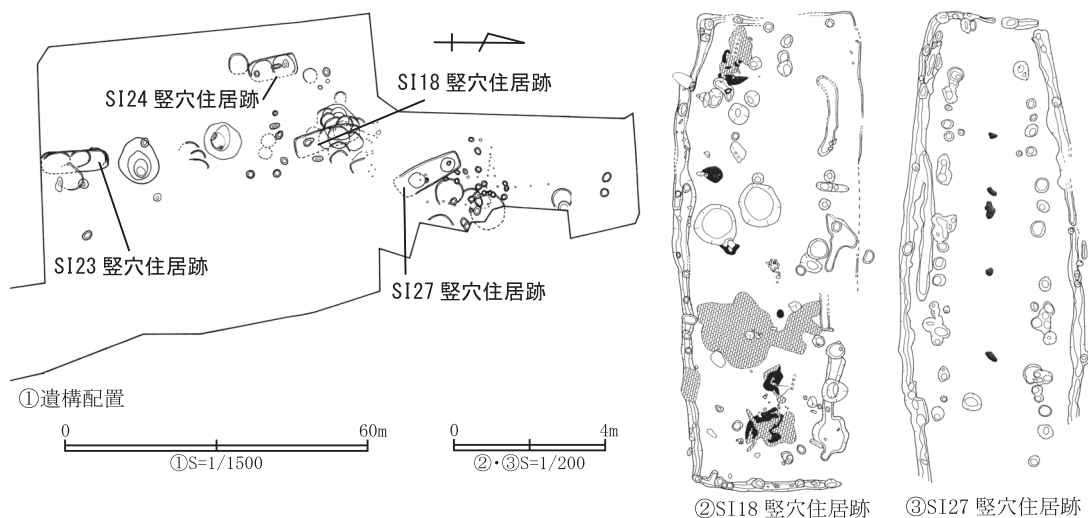
この時期の三陸沿岸部では、竪穴住居跡以外の遺構の種類や数量の差はあるものの、竪穴住居跡が、環状に配置されず列状となることや、長方形大型住居跡以外の住居跡が多数認められる。このことは、綾織新田遺跡とは異なった三陸海岸沿岸部の集落遺跡における特徴であると言える。

(2) 北上山地内の遺跡

北上山地内の前期中葉の長方形大型住居跡を有する集落遺跡としては、住田町館遺跡がある〔北田ほか2004〕。この遺跡は、気仙川の支流である小又川と大又川の合流地点近辺の緩斜面上に位置する。2001・2002年に調査がなされ、縄文時代前期と中期を主体とする竪穴住居跡が41軒確認された(第6図①)。館遺跡は、綾織新田遺跡とは直線距離にして36km程度離れており、峠を一つ越えれば、綾織新田遺跡の近辺に出ることができる地点に位置している。

館遺跡で確認された竪穴住居跡のうち SI18・23・24・27 竪穴住居跡の4軒が、長方形大型住居跡となる。同時期の竪穴住居跡は、この長方形大型住居跡しか存在していない。時期が確定できるのは SI18・27 竪穴住居跡の2軒であり、床面出土土器から大木4式期の住居跡と判断できる。残りの2軒に関しては出土遺物が少なく、重複関係からも時期が比定しづらい。ただし、これらの竪穴住居跡の位置関係や遺跡出土土器の出土量からすると、時期比定ができた2軒と近い時期であると推測できる。そして、これらの長方形大型住居跡は、沢田 I 遺跡と同様に等高線にそって並ぶ。

竪穴住居跡3軒に関しては長軸の一端が不明であることから復元し、4軒を計測した。長軸長が判明する SI18 竪穴住居跡は、面積が52.3㎡で、長軸・短軸比は2.7となる(第6図①)。この面積は、綾織新田遺跡の拡張後の竪穴住居跡の規模とほぼ近似する値である。SI27 竪穴住居跡は、南側がより伸びる可能性があるが、現在している部位から推定復元すると、その規模は55.2㎡、長軸・短軸比は3.5となる(第6図③)。その規模は、SI18 竪穴住居跡と近似する値となる。報告書で指摘されている通り、この竪穴住居跡は、西側内部に2条の周溝が認められ、柱穴も2時期確認できることから、拡張を行った竪穴住居跡である。SI23 竪穴住居跡は、推定復元の規模で48.9㎡、長軸・短軸比



第6図 館遺跡の遺構配置と長方形大型住居跡(北田ほか2004を元に改変)

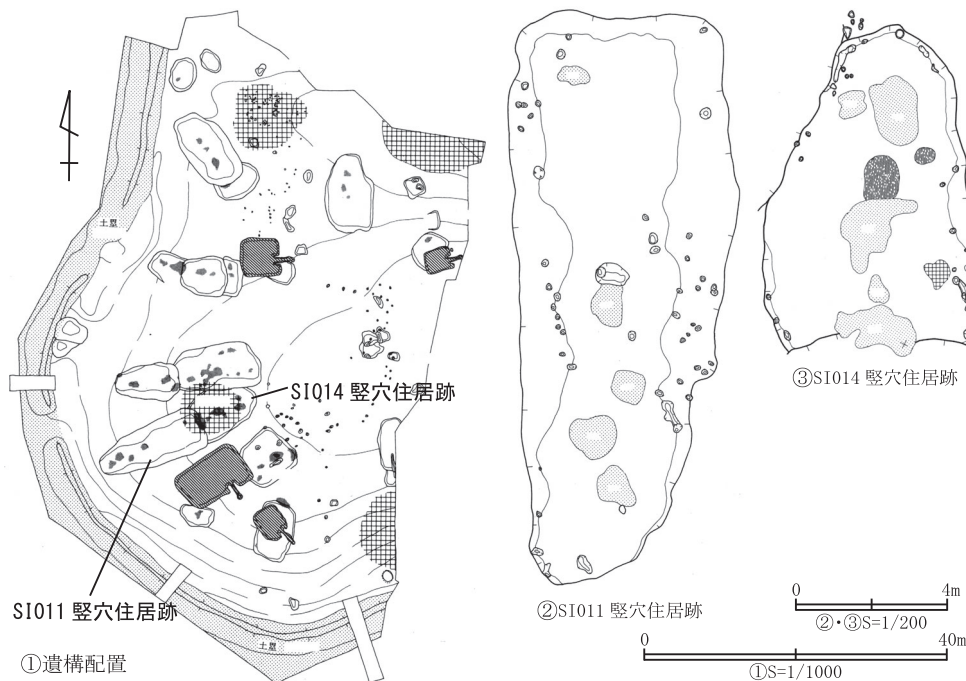
は2.8である。SI24 堅穴住居跡は、推定復元の規模で39㎡、長軸・短軸比は3である。こちらの堅穴住居跡の長軸が、どの程度伸びるかは不明であるが、SI18 堅穴住居跡のあり方からすると、それほど長大なものにはならない可能性が高い。

館遺跡では堅穴状遺構も存在するが、時期が比定できる前期の遺構は少ない。その中でも綾織新田遺跡のような小堅穴遺構は確認されていない。土坑も同様であり、前期と推定される貯蔵穴は非常に少ない。長方形大型住居跡が列状に配置されることを評価するならば、館遺跡は沢田Ⅰ遺跡等と類似するあり方を示すものと考えられる。館遺跡と綾織新田遺跡はほぼ同時期であり、近い位置にはあるが、その集落構造は大きく異なっていると言える。

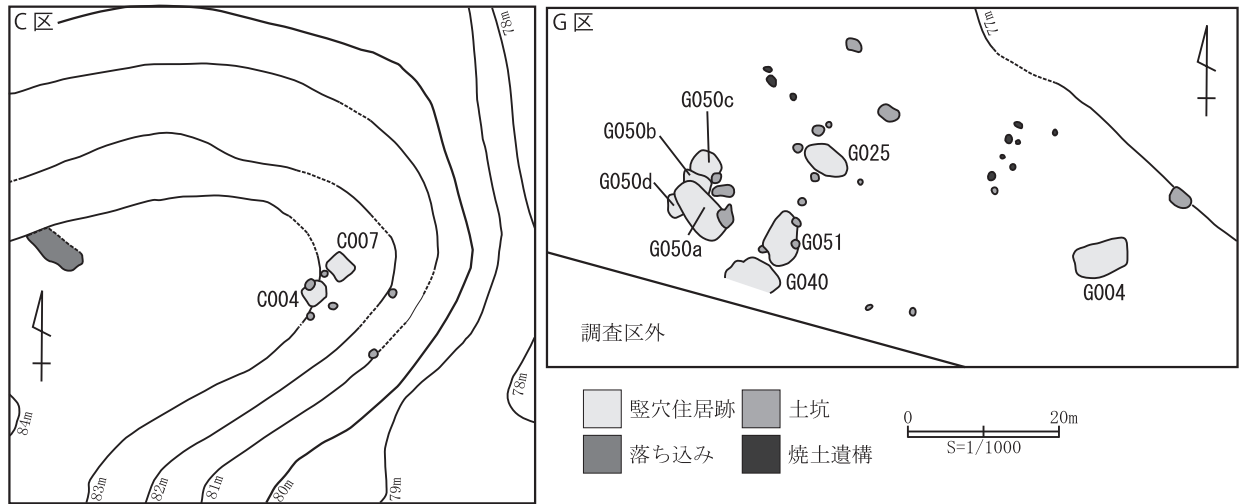
(3) 北上川流域の遺跡

北上川流域のこの時期の集落遺跡としては、北上川支流和賀川西岸の奥羽山脈の裾部の丘陵頂部に位置する北上市蟹沢館遺跡がある[浅田1993]。概報のみであるので確定的なことは不明ではあるが、大木3～4式期頃の規模の大きな住居跡が検出されている。これらの堅穴住居跡は、等高線に対して長軸方向が直行し、丘陵頂部平坦面を中心とする明確な環状構成となる(第7図①)。未調査の区域もあるが、おそらくその部分にも堅穴住居跡が分布するものと考えられる。また、土坑の一部は中央の平坦面に分布するが、その詳細は不明である。何れにせよ、概報のみであるので、詳細な検討はできない。

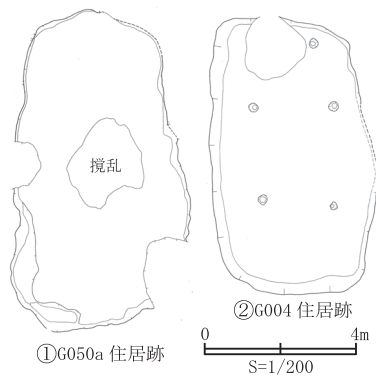
図示されているSI011 堅穴住居跡は、規模43.9㎡、長軸・短軸比は4.5となる(第7図②)。その形状は不整形な長方形である。そのほかに、楕円形や方形や小型方形等の様々な規模や形状の堅穴住居跡が存在しているようである(第7図③)。これらの堅穴住居跡には、周溝は確認されておらず、



第7図 蟹沢館遺跡の遺構配置と堅穴住居跡(浅田1993を元に改変)



第8図 南部工業団地内遺跡における前期の遺構配置(杉本ほか1995を元に再トレースし改変)



第9図 南部工業団地内遺跡の竪穴住居跡
(杉本ほか1995を元に改変)

明瞭な主柱穴が並ぶというような整然とした配置関係も認められない。このような形態は、規模の点からすると長方形大型住居跡の範疇に含まれるが、綾織新田遺跡等の長方形大型住居跡とは構造が異なっている。これらの違いを踏まえ、本論では、綾織新田遺跡を事例としては、四隅が角となり長方形に近く、周溝を有し、その周溝内には小型の柱穴をまばらに配置するものを1類とする。一方で、蟹沢館遺跡を事例として、四隅に丸みを有し、長楕円形となるような形状で、周溝は存在するものの断続的である形態を2類とする。

そのほかの同時期の集落遺跡として南部工業団地内遺跡がある [杉本ほか 1995]。大木 2a 式～大木 3 式期の規模の小さな集落遺跡である。時期が比較的明確な竪穴住居跡は、重複含め 11 軒あり、時期ごとに分布が分かれる⁽³⁾。D 区では大木 2a 式期の竪穴住居跡 1 軒、C 区では大木 2b 式期の竪穴住居跡 2 軒が確認されており、近辺に少数の貯蔵穴を有している。この C 区では、他の時期の遺構も少なく、極めて小規模な集落の姿が明瞭に把握できる (第 8 図)。

G 区では、大木 3 式期の竪穴住居跡が重複含め 8 軒存在する (第 8 図)。これらの竪穴住居跡は、平坦部に密接して分布しているが、何らかの整った配置状況を示すものではない。そして、竪穴住居跡には重複関係もあり、同時に機能していた竪穴住居跡数はより少ないが、継続的にこの場が利用されていたことがわかる。それらの竪穴住居跡の中でも、G050a 竪穴住居跡の規模が最も大きい (第 9 図①)。その規模は 28.6m²、長軸・短軸比は 2 となり、綾織新田遺跡の小さな長方形大型住居跡と同等の規模を有している。ただし、形状はやや楕円形に近く、柱穴や周溝、炉跡は認められない。その次に規模の大きな G004 竪穴住居跡は、長軸・短軸比が 1.7 とやや小さい (第 9 図②)。

これらの竪穴住居跡の中には、主柱穴らしい柱穴も確認できるが、炉跡は認められない。このような構造からは、綾織新田遺跡の長方形大型住居跡の構造とは全く異なっている。むしろ、柱穴配

置が不明確なことなどを踏まえると、蟹沢館遺跡の堅穴住居跡の構造に近い。また、堅穴住居跡と同時期の貯蔵穴は、堅穴住居跡近辺の土坑群が該当している。大木 2b 式期における C 区の状況と同様である。

これらの北上川流域の遺跡群においては、規模からすると長方形大型住居跡と言える堅穴住居跡が存在する。そして、蟹沢館遺跡では環状構成となるものと考えられるが、その堅穴住居跡の形態は綾織新田遺跡とは異なる点が多く認められる。蟹沢館遺跡は概報のみであるので判断が難しいが、北上川流域の環状集落の長方形大型住居跡は、綾織新田遺跡を含む北上山地・三陸沿岸部の集落遺跡のあり方とは異なっていた可能性が高い。ただし、貯蔵穴が堅穴住居跡近辺に少数分布するあり方は同様であり、類似する生活様式を有していたものと推察できる。

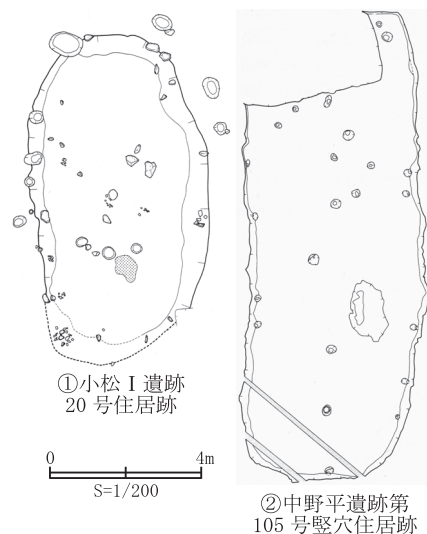
(4) 長方形大型住居跡を有する集落遺跡の特徴

岩手県南部における最初期の長方形大型住居跡が主体となり構成される集落遺跡は、大木 2b 式期の綾織新田遺跡である。その他の大木 2b 式期の長方形大型住居跡は、三陸沿岸部の沢田 I 遺跡等にも認められ、堅穴住居跡の近辺に貯蔵穴を有するという特徴は一致する。しかし、沢田 I 遺跡等では通常規模の堅穴住居跡も多数存在しており、綾織新田遺跡とは遺構の構成で異なっている。さらに、三陸沿岸部の長方形大型住居跡は、列状に配置されており、環状に近い構成を示す綾織新田遺跡とはかなり異なった様相を示していた。

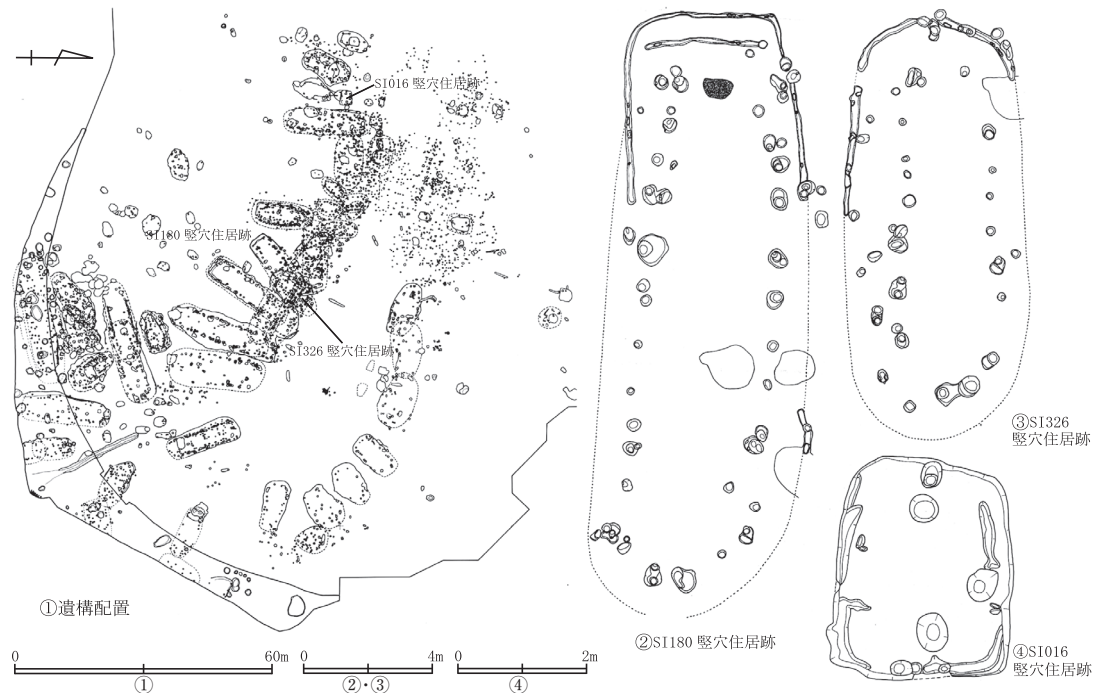
一方で、同時期の北上川流域では、長方形大型住居跡による集落遺跡はまだ認められず、南部工業団地内遺跡のように通常規模の堅穴住居跡が極少数存在するに留まる。これらの様相からすると、大木 2b 式期における長方形大型住居跡を含む集落遺跡の形成については、かなり狭い地域ごとに個々の特徴が認められる状況となっていたことが想定される。

長方形大型住居跡 1 類の出現のきっかけは不明である。前時期において周辺地域で同様の堅穴住居跡の事例はない。北上山地の早期中葉から前期初頭にかけての集落遺跡として小松 I 遺跡がある

[吉田 2004]。気仙川沿いの山地間の狭い場所に位置しており、早期中葉 12 軒、早期後葉・末葉 45 軒、前期初頭 12 軒の堅穴住居跡が確認されている。前期初頭の堅穴住居跡のうち、規模が大きいものとしては、20 号住居跡（第 10 図①：22.6㎡）と 24 号住居跡（40.0㎡）がある。そして、20 号堅穴住居跡の方は長軸／短軸比が 2.1 となり、この規模だけ見れば長方形大型住居跡に相当する大型の堅穴住居跡である。しかし、その形状は長楕円形で、柱穴跡も不明であり、地床炉が片側に寄って存在する形態は、長方形大型住居跡 1 類とは全く異なる形態である。このようなことから、この地域の早期から続く集落の堅穴住居跡から長方形大型住居跡 1 類へと変遷したとは考えづらく、小松 I 遺跡の大型の堅穴住居跡は、蟹沢館遺跡の長方形大型住居跡 2 類等に近い⁽⁴⁾。長方形大型住居跡 1 類の前段階としては、早



第10図 小松 I 遺跡と中野平遺跡の大型の住居跡
(吉田2004, 三浦ほか1991を元に改変)



第11図 上ノ山Ⅱ遺跡の遺構配置と竪穴住居跡(①山崎1989, ②～④大野ほか1988を元に改変)

期中葉の青森県おいらせ町中野平遺跡第105号竪穴住居跡(第10図②: 49.7㎡: 三浦ほか1991)のような事例を想定しやすい。しかし、周辺遺跡における同様の事例が少なく、長方形大型住居跡1類の系統関係は不明と言わざるをえない。

次の大木3式期になると、南部工業団地内遺跡のような小規模な集落遺跡が継続すると共に、蟹沢館遺跡を事例として北上川流域に長方形大型住居跡2類による環状集落遺跡が出現する。この時期におけるその他の特徴については、調査された集落遺跡の少なさもあり、不明なことが多い。北上川流域より南方の仙台湾周辺地域では、宮城県利府町六田遺跡〔庄司1987〕などで、小型で方形に近い形状の竪穴住居跡が1～2軒確認できる程度である。六田遺跡や南部工業団地内遺跡のような小規模集落遺跡が、該期の通常集落遺跡である可能性はある。以前の論考〔菅野2009〕では、この時期のあり方、東北北部における円筒下層式土器の出現と合わせ、地域性の進展として捉えたが、集落遺跡数が少ないため判然としない。

大木4式期には、綾織新田遺跡、蟹沢館遺跡のように環状となる集落遺跡が継続する一方で、北上山地内の館遺跡では、長方形大型住居跡1類が、等高線に沿うような形で列状に配置されている。この配置関係は、三陸沿岸部の沢田Ⅰ遺跡と同様であり、北上川流域では確認されていない⁽⁵⁾。

一方、奥羽山脈を越えた秋田県大仙市(旧協和町)上ノ山Ⅱ遺跡では、細かな時期は判然としないが、大木4式～大木5a式期頃の竪穴住居跡が放射状に並び、綾織新田遺跡のような環状に近い構成となっている(第11図①:〔大野ほか1988, 山崎1989〕)。この遺跡の竪穴住居跡の詳細な時期を捉えることが難しいため断言することは難しいが、この時期には北上川流域と雄物川流域でも環状に近い構成の集落遺跡が存在していたことは指摘できる。上ノ山Ⅱ遺跡の竪穴住居跡は、形状が明確なものそれほど多くはないが、楕円形を呈している住居跡が多く、蟹沢館遺跡と類似するあり方を示すものと考えられる(第11図③)。小型方形のプランで周溝を有するもの(SI1016竪穴住居

跡等：第11図④）、周溝を有し長方形に近い大型住居跡もある（SI180 堅穴住居跡等：第11図②）が、住居跡に伴う出土土器に乏しく、詳細な時期が不明である。

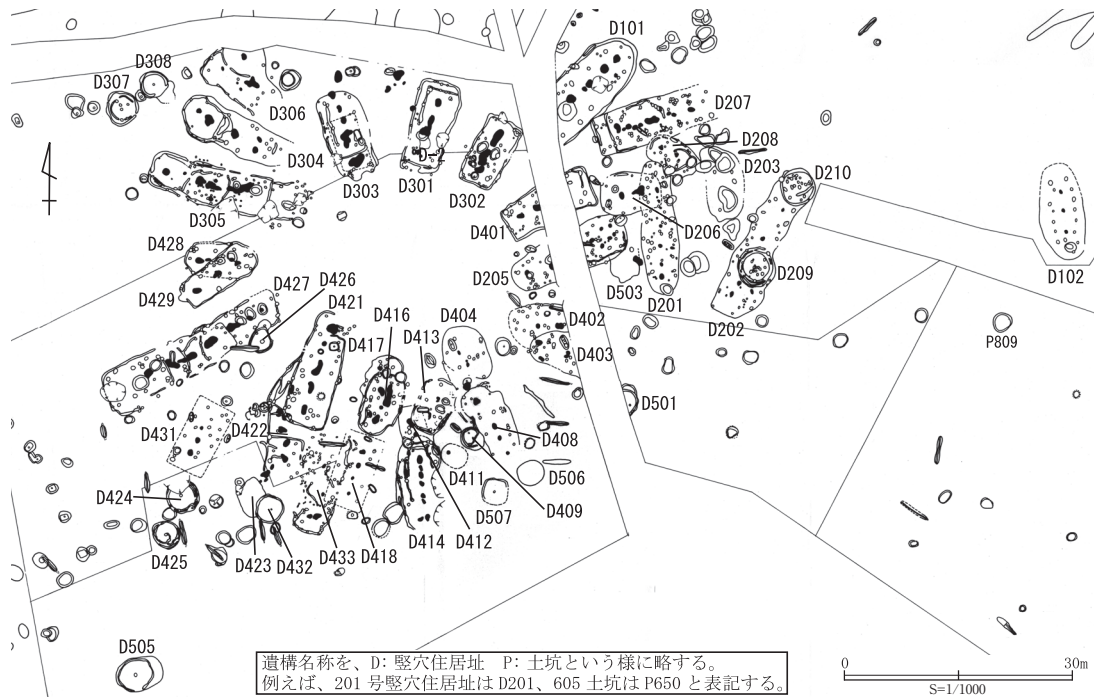
北上川・雄物川流域と北上山地・三陸沿岸部では、長方形大型住居跡の形態が異なっている。もちろん、今後の調査事例により変化することはあり得るが、現段階では異なる地域性があったものと考えられる。さらに南方の仙台湾周辺地域では、集落遺跡がほぼ無くなる時期でもあり、地域の特徴がより明瞭となっている。日本海側の事例ではあるが、山形県高島町押出遺跡〔佐藤ほか1990〕の存在等から、「低地への進出」があったことが推定されている〔小林2014〕。おそらく仙台湾周辺においても、そのような様相が想定できる〔菅野2015〕。なお、三陸沿岸部の陸前高田市牧田貝塚〔村上・佐々木1994〕や雲南遺跡〔遠藤ほか2006〕では、前後の時期の土器を含め多量の土器等が出土していることから、三陸沿岸部では生業活動も活発化している様相が窺える。⁽⁶⁾

なお別稿にて、この時期の東北地方におけるこうした顕著な地域性の出現の背景として、十和田火山の噴火による環境の大きな変化が影響するものと推定した〔菅野2015〕。本論での対象範囲内に限って言えば、長方形大型住居跡を主体とする環状集落が展開した要因の一つとしても考えられる。その一方で、綾織新田遺跡に認められるような環状集落遺跡の出現に関して言えば、十和田火山の噴火を全面的な理由として想定することは難しい。綾織新田遺跡の埋土に火山灰を含む「第Iグループ」の堅穴住居跡の存在からすると、環状集落形成の初期段階の後に十和田火山が噴火したこととなる。沢田I遺跡の長方形大型住居跡1類（RA201 住居跡）にも、同様の状況が見て取れる。沢田I遺跡の報告者が指摘しているように、「火山灰が降下したことにより集落が移動したりせずに、同じ場所で継続して営まれた」〔佐々木ほか2000：p.302〕ということとなる。

一方、仙台湾周辺地域では、大木1式期に大規模な集落遺跡が出現した後、大木2a式期以降には堅穴住居跡数が減少し始め、大木2b式期には激減する。つまり、堅穴住居跡数の減少は、十和田火山の噴火以前より始まっており、その後に減少傾向が加速している。おそらく、何らかの内在的な要因があるものと考えられる。そして、本論での対象範囲内地域においても同様の様相であったことが想定される。

③……………前期後半期の環状集落遺跡 —大清水上遺跡の特徴—

前期後半の大木5式から大木6式期になると、長方形大型住居跡を有する規模の大きな環状集落遺跡が出現する。その代表的な集落遺跡が岩手県奥州市大清水上遺跡である〔草間ほか1963, 小原・鈴木1985, 佐藤・中村2006, 朴沢・早田2008〕。この遺跡は、胆沢扇状地の扇頂部の北上川支流胆沢川の右岸段丘上に位置する。これまでに4回の発掘調査がなされている。このうち、2000～2004年の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの調査により、環状集落遺跡のほぼ全域の調査がなされた（第12図）。この際に検出された集落遺跡の堅穴住居跡の時期は、大木5式期が主体となる。軒数は、重複などのものを含めて59軒確認できる。なお、大清水上遺跡は、2008年国史跡に指定され、報告書刊行時の呼称である「おおしみずかみ」遺跡から、「おおすずかみ」遺跡へと変更されている。



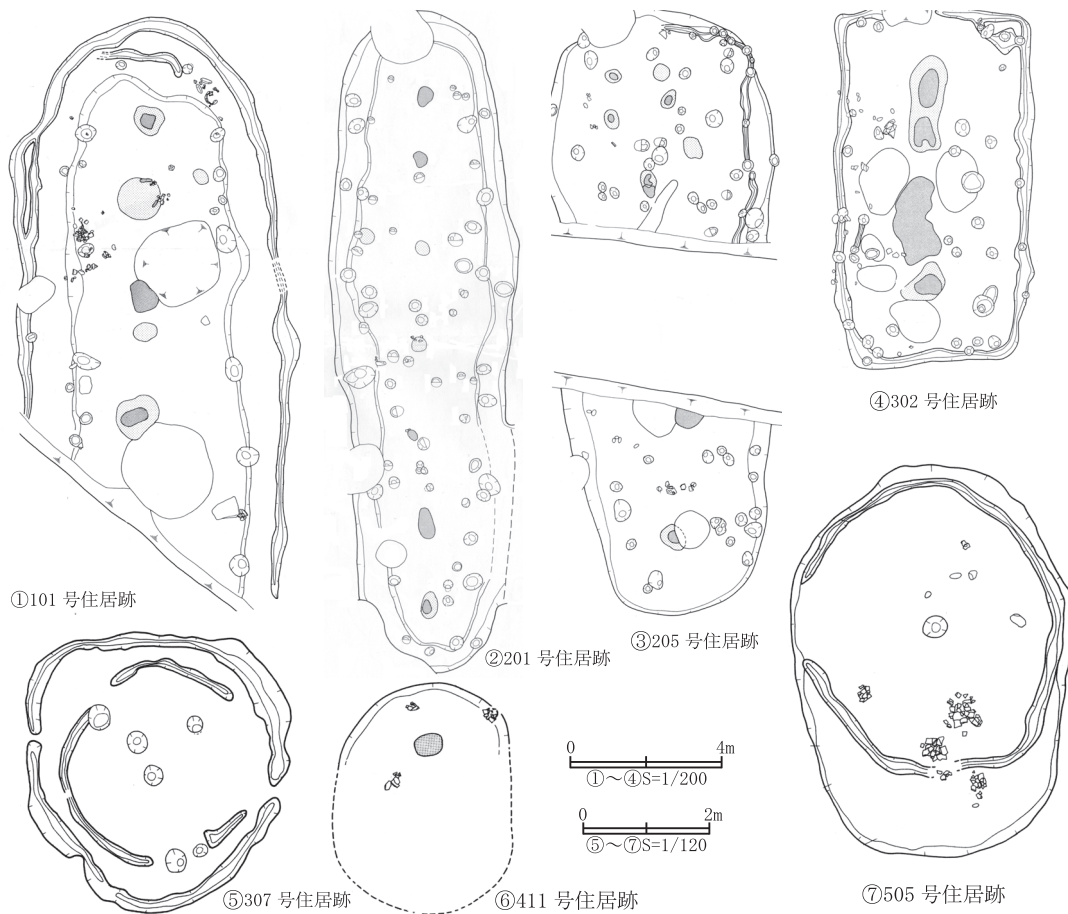
第12図 大清水上遺跡における主要遺構の配置(佐藤・中村2006を元に改変)

(1) 竪穴住居跡の規模・形態と貯蔵穴

竪穴住居跡の規模は、先の綾織新田遺跡の基準を当てはめると13軒が長方形大型住居跡に該当する。これらの竪穴住居跡は、34.8～99.8㎡までの規模となる。また、長軸・短軸比が2.0より小さいが、面積が25㎡以上で、長方形大型住居跡と形態が似ている竪穴住居跡が認められる。それは、302・303・412・416・427号住居跡の5軒である(第13図④)。綾織新田遺跡でも、形状は長方形大型住居跡に類似しながらも、その規模は大型とされない住居跡が存在していたが、それと同様の住居跡であると考えられる。

報告書では竪穴住居跡の形状に関して、竪穴住居跡の隅が角となるものと、それが認められないものが存在するとしている[佐藤・中村2006:p.307]。隅に角が認められる竪穴住居跡は、周溝を有するものがほとんどであり、長方形大型住居跡1類と同様である。建替えの痕跡も認められる。角が無く丸みを有する形状の竪穴住居跡は、長方形大型住居2類と同様であるが、長楕円形で床面に段を有するものもある。この種の竪穴住居跡には、とくに規模が大きいものが多い。

大清水上遺跡では、土坑が203基確認されている。報告書では、その形状等から4種類の機能に分類しており、その中で貯蔵穴と推定された土坑は80基ある。これらの貯蔵穴群の分布は、竪穴住居跡と重複あるいは周辺に分布するものと、より離れた場所に分布するものがある。その離れた場所の一つである調査区北西部では竪穴住居跡は発見されていないが、土坑群のみが散漫に分布している。これらの土坑のうち、605号土坑では埋土下位から晩期土器が出土している。調査区南東側にも、同様に土坑群が散漫に分布している。809号土坑では、床面直上の炭化物の年代測定が弥生時代の値を示している。これらの内容からすると、環状集落部から離れた場所の貯蔵穴は、時期が異なる可能性が高い。前期の貯蔵穴は、前時期と同様に竪穴住居跡の周辺に分布していたと考えられる。



第13図 大清水上遺跡の竪穴住居跡(佐藤・中村2006を元に改変)

(2) 竪穴住居跡の特徴

大部分の竪穴住居跡は、大木5式期に比定できる。そして、最も軒数が多いのが、大木5a式期[興野1970, 千葉2007]の38軒であった。時期不明のものも含めると、実際はより多いものと考えられる。

その中で最も特徴的な形態となるのが201号住居跡である(第13図②)。この竪穴住居跡は、長楕円形を呈する規模の大きな住居跡であり、床面に段を有している。柱穴は、その段との境近辺に並ぶ。炉は地床炉であり、中央に列状に並ぶ。この形態は、長方形大型住居跡2類と近似するものと捉える。また、この竪穴住居跡の長軸方向は、環状集落の中央部に向いておらず、北側を向いている。同時期の同様の竪穴住居跡としては、402号住居跡が該当するが、大部分は調査区外へと伸びており、その全体像は不明である。そのほかには205・403・414号住居跡のように、楕円形ではあるが、段を有していない竪穴住居跡もある(第13図③)。長方形大型住居2類と考えられる。これらの竪穴住居跡は、主に南東側に分布する。

また、長方形大型住居跡1類は多く認められる。先述のように302・303号住居跡等は、その規模はそれほど大きくはない(第13図④)。427号住居跡では、そのような長方形住居跡が多数重複している様相が見て取れる。その場合、柱穴や周溝の配置関係から、拡張を含む建替えをした場合と、近い場所で建替えをした場合があるようであるが、判断としない。305号住居跡も同様である。こ

これらの竪穴住居跡は、南東部以外に分布しており、長方形大型住居2類とは分布を異にしている。

小型円形の竪穴住居跡が7軒存在する。周溝を巡らせ、中央に柱穴をもつものが認められる(第13図⑦)。炉跡は、周溝を有さない411号住居跡のみに地床炉が1基認められるだけである(第13図⑥)。柱穴は、それほど多くはない。308号住居跡は、壁際に周溝が巡り、中央に1基のみ柱穴が認められる。テント状のような簡易な形態の上屋構造であった可能性が考えられる。また、505号住居跡で認められるように、周溝外の一部にも掘込が認められる場合がある(第13図⑦)。このような施設は、入口部等の外部へと張り出す一連の施設と考えられる。似たような構造は、308・409号住居跡にも認められる。また、報告者も指摘するように、長方形大型住居跡よりやや外側に位置する場合がほとんどである。炉跡を有する411号住居跡以外のこのような小規模で簡素な形態の竪穴住居跡に関しては、その位置などからも綾織新田遺跡で認められた小型方形の竪穴遺構と類似した機能を想定できる。しかし、その具体的な内容は不明である。

大木5b式期[興野1970]の竪穴住居跡と考えられるのが、202・203・206・428・429号住居跡の5軒であり、軒数は格段に減少する。これらの竪穴住居跡のうち、202・203・206号住居跡は環状集落の東側、428・429号住居跡は環状集落の西側に位置する。

202号住居跡は、長軸方向が特に長い長方形に近い大型住居跡である。報告書では、柱穴配置からa・b・cの3時期に区分されている。本論では、柱配置と平面形状からaとbは同一の住居跡、cは別の住居跡と推定した。そして、南側を209号住居跡と、そのc期の住居跡が重複していることから攪乱を受けているようである。a・b期住居跡に関して、その攪乱部分について復元した上で計測した所、その規模は72.9㎡、長軸・短軸比は5.8となり、かなり長大な竪穴住居跡となった。炉跡はほぼ中央に列状に並ぶようであるが、その炉跡自体は小さい。203号住居跡は、不整楕円形の竪穴住居跡である。炉跡は無い。規模は9.2㎡と小さい。206号住居跡は、東側が201号住居跡と重複しているため、規模などの詳細は不明である。残存した部位からすると、206号住居跡は楕円形を呈し、炉跡が中央に列状に並ぶ構造であったと考えられる。また、これらの竪穴住居跡は、長方形大型住居跡2類と考えられる。

西側に位置する428・429号住居跡は、ほぼ同規模の重複する竪穴住居跡である。429号住居跡は、長方形を呈しているが、北側は428号住居跡と重複し切られている。その規模は37.8㎡であり、長軸・短軸比は2.8となる。429号住居跡より新しい428号住居跡は、長楕円形に近い形状となる。その規模は34.8㎡であり、長軸・短軸比は2.0である。これらの規模は、長方形大型住居跡の範疇に収まる。これらの竪穴住居跡は、周溝を有することから、長方形大型住居跡1類の範疇として捉えたい。

この大木5b式期の竪穴住居跡は、西側に長方形大型住居跡1類の428・429号住居跡があり、環状集落中心部を挟んで対角線上に長方形大型住居跡2類の206号住居跡が存在する。この206号住居跡は、想定される規模からすると、428・429号住居跡と近似する値となることが推測される。一方で、202号住居跡は、前時期の201号住居跡と同様に、環状集落内のほかの竪穴住居跡とは全く異なった方向を向いている。

大木6式期⁽⁷⁾と推定される竪穴住居跡は、調査区東側に位置する101号住居跡と102号住居跡の2軒のみである。101号住居跡は、201号住居跡と同じ形態で、段を有する長方形大型住居跡2類として捉える(第13図①)。西端は調査区外のため、確実な規模等の詳細は不明である。102号住居跡も、

同様の構造である。報告書にて推定復元されている規模を計測すると、規模は52.2㎡、長軸・短軸比は2となり、かなり規模の大きい竪穴住居跡となる。

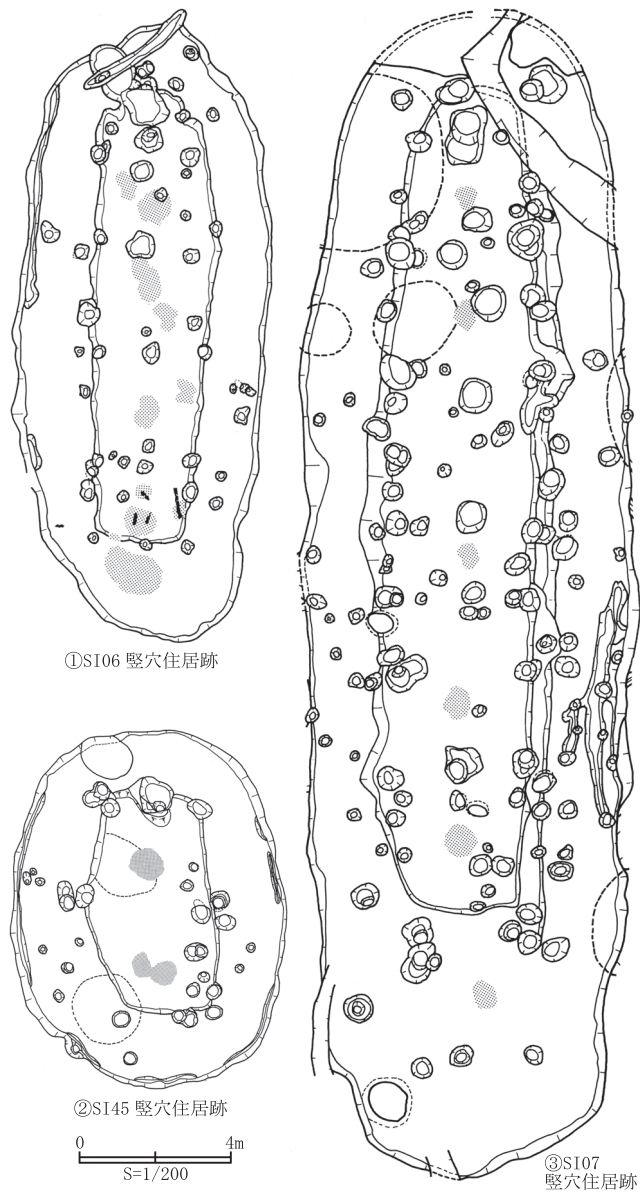
なお、大清水上遺跡は、1984・1985年にも調査がなされている[小原・鈴木1985]。この調査地点は、正確な位置は不明であるが、埋蔵文化財センター調査地点の西端付近と推定されている。この調査区では、円形あるいは楕円形を呈する竪穴住居跡6軒が確認されている。それぞれの時期は、不明確な部分もあるが、出土土器から大木5b式～大木6式期に該当するものと想定できる。Bj27住居跡(大木5a式期?)は、段を有する規模の大きな竪穴住居跡である。面積は34.2㎡、長軸・短軸比は1.9と、長方形大型住居跡とほぼ同程度の規模となる。これらの竪穴住居跡は、時期からすると環状集落部分と近い時期のものとして捉えることができる。

(3) 大清水上遺跡の特徴

大清水上遺跡では、大木5a式期に多数の竪穴住居跡により環状集落が形成される。次の大木5b式期では、竪穴住居跡数は減少する。しかし、大木5b式期における竪穴住居跡の配置からは、

前時期の環状構成を維持しようとする意図は見受けられる。そして、大木6式期には、環状集落部には竪穴住居跡が構築されなくなり、東側の場所にものみ竪穴住居跡が構築されている。この頃には、当遺跡における環状集落の構成は放棄されたものと考えられる。

また、大木5a式期から大木6式期まで継続して存在している段が付く大型住居跡は、大清水上遺跡の東側のみに位置しており、大木5a式期の402号住居跡以外は、環状集落の中心とは別の方に長軸方向を向けている。このようなあり方からすると、環状集落部を形成していた一群とは区別的な状況が認められる。なお、同様の形態の竪穴住居跡は、円筒土器分布圏の秋田県能代市杉沢台遺跡(第14図:[永瀬ほか1981, 山崎・播摩2006])などでも認められる。このような竪穴住居跡は、「円筒下層式・上層式の流通圏に分布することが明らか」であり、円筒下層d式期の竪穴住居跡に多いこ



第14図 杉沢台遺跡の長方形大型住居跡
(永瀬ほか1981を元に改変)

とが指摘されている [新海 2011]。

④……………北上川支流域における前期後半の集落遺跡

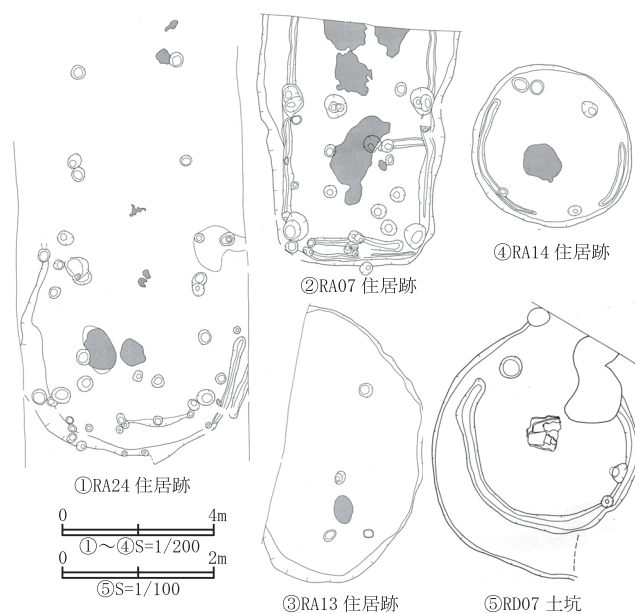
(1) 峠山牧場 I 遺跡

北上川流域の前期後半における長方形大型住居跡を有する集落遺跡としては西和賀町峠山牧場 I 遺跡がある [阿部 2000]。この遺跡は、北上川支流の和賀川右岸の河岸段丘緩斜面部に位置している。全面的な発掘調査がなされていないため詳細は不明であるが、大木 5b・6 式期と推定される竪穴住居跡 31 軒が確認されている。調査された範囲内では、大木 6 式期と推定される竪穴住居跡の方が多い。これらの竪穴住居跡の配置に関して、報告者は「放射状の配列」と指摘しており、環状に近い構成となるものと推定される。この中で長方形大型住居跡と推定される住居跡は、大清水上遺跡と同様に、長方形大型住居 1 類 (RA7・9 住居跡等：第 15 図②) と 2 類 (RA15・24 住居跡等：第 15 図①) が存在する。床面に段を有すると想定されるもの (RA2 住居跡) もある。長方形のものは、南西方向に多く密集して分布し、それ以外の場所には楕円形のもの分布する。確定はできないが、大木 5b 式期の長方形大型住居跡と推定できるのは RA24 住居跡のみであり、そのほかは楕円形あるいは円形の住居跡となる。

長方形大型住居跡以外に、大清水上遺跡における小型円形の竪穴住居跡と類似する遺構も存在する。RD7 土坑とされた遺構は、大木 5b 式期の遺構と考えられるが、大清水上遺跡の事例と同様に、床面に円形の周溝を有し、炉跡は無い (第 15 図⑤)。そのほかで類似する形態のもので、炉跡を有するものとしては、RA14 住居跡がある (第 15 図④)。それぞれの規模は、RD7 土坑が 7.9m²、RA14 住居跡は 11.1m²であり、大清水上遺跡の類似する遺構と同規模である。また、通常規模の楕円形の

竪穴住居跡も存在する。確実に確認できるものとして 2 軒 (RA13・19 住居跡：第 15 図③) あり、中央より壁寄りの方に地床炉を有している。RA19 住居跡は中央部にも地床炉が確認されている。規模が計測できた RA13 住居跡の規模は、24.3m²である。

本遺跡の貯蔵穴は、竪穴住居跡の側からも発見されているが、環状集落部よりは西側に位置している。これらの貯蔵穴の中では、断面形状はフラスコ状を呈し、床面中央部に柱穴状のピットを有し、それから壁際に向かい十字に溝が伸びる形態が特徴的である。この形態の貯蔵穴は、綾織新田遺跡には



第 15 図 峠山牧場 I 遺跡の遺構 (阿部 2000 を元に改変)

無いが、大清水上遺跡では少数が認められる。また、貯蔵穴（RD11・42土坑）の埋土からは、ク
リが発見されており、報告者の渡辺誠氏は取り残して残ったものと解釈している。これらの貯蔵穴
の床面積の規模は、最大3.9㎡（RD6土坑）であり、形態は異なるが綾織新田遺跡の小型竪穴遺構
と同規模となるようなものもある。

この峠山牧場I遺跡の全体像は不明ではあるが、これらの様相からすると大清水上遺跡と類似す
る遺跡であることが想定される。ただし、機能していた時期は大木5式期よりは大木6式期が主体
となり、竪穴住居跡が増加する時期が異なっている。

(2) 鳩岡崎遺跡

集落構成の確実な内容は不明であるが、環状構成を呈する可能性がある遺跡として北上市鳩岡崎
遺跡がある（第16図：[相原ほか1982, 小山内1996, 高橋1982・1983・2001, 岩田2004]）。鳩岡崎遺跡は、
村崎野段丘の舌状に張り出した先端部付近に位置する。細かな時期は比定できないが大木5式期、お
そらく大木5a式期と考えられる竪穴住居跡は、SI08・12・13竪穴住居跡の3軒である [小山内1996]。
全体の形態が明確ではないが、SI12竪穴住居跡は長方形大型住居跡2類（第16図③）、SI13竪穴住



第16図 鳩岡崎遺跡の遺構配置と竪穴住居跡
①岩田2004, ②～④小山内1996を元に改変)

居跡は長方形大型住居跡1類であろうか(第16図④)。これらの堅穴住居跡は、北側に向かって堅穴住居跡の長軸方向を向けており、北側に環状集落の中央部があることが想定できる。この北側は、緩やかに傾斜しながら藤沢川に至る場所であり、この場所にも大木5式期の堅穴住居跡が存在する可能性は高い。計測できた堅穴住居跡は、SI13 堅穴住居跡(大木5a式期)の1軒のみである(第16図④)。この堅穴住居跡は、建替えを2回以上行っている。その最終的な規模は、面積153.7㎡、長軸24.3m、長軸・短軸比は3.8となり、かなり規模の大きな堅穴住居跡となる。

大木6式期になると、丘陵先端部に長方形大型住居跡を構築する。報告者も指摘するように、この調査部分は、環状集落の東端部に位置するものと推定される[相原ほか1982]。こうした長方形大型住居跡は、大木7式期まで継続するが、遺構分布の主體的な場所は時期によって変わる[小山内1996、岩田2004]。鳩岡崎遺跡における集落構成の全容は不明ではあるが、長方形大型住居跡を大木5a式期から有していることなどからすると、大清水上遺跡のような環状構成の集落遺跡が存在していた可能性が高い。しかし、床面に段を有するような堅穴住居跡が存在するかどうかは不明であり、現在のところは北上川流域の大木5a式期には、環状集落遺跡が大清水上遺跡の一遺跡のみではなく、複数存在していたことを指摘するに留めたい。

なお、堅穴住居跡のほかにとくに目立つのが、貯蔵穴の存在である。大木5式期には堅穴住居跡の周辺に貯蔵穴が散漫に分布しているが、大木6式期以降になると、貯蔵穴が密集する区域が認められる。1973～1976年の第1次調査区南端部では、大木6～8式期の貯蔵穴が密集している。ただし、この区域の中にも、大木7a式期の小型円形の堅穴住居跡(EC62 堅穴住居跡)や、おそらく近い時期の堅穴住居跡も数軒あることから、居住域と重複するように貯蔵穴を多数構築したものと考えられる。このような状況は、1982年の第3次調査でも認められる。大木8b式期の堅穴住居跡と重複して多数の貯蔵穴が確認されている[高橋1983]。大木5・6式期において、このような貯蔵穴が密集する状況は、奥州市大中田遺跡[中村2004]、新田遺跡[金子2002]などでも認められる。しかし、時期比定が難しく詳細は判然としないが、大木6式期には確実にそのような状況が北上川流域で認められる。各地の貯蔵穴を対象とした坂口隆氏による研究では、前期後半の円筒下層土器分布圏では、「貯蔵区域」が形成されているのに対して、同時期の長方形土器分布圏ではそのような区域が未発達であることが指摘されている[坂口2003]。長方形大型住居跡による集落遺跡の変遷を追求するためには、今後大木6式期の集落遺跡の詳細な検討を通じ、貯蔵穴を含めた集落構造について明らかにする必要がある。

⑤……………前期における集落遺跡の変遷

綾織新田遺跡は、段丘上頂部のやや平坦な面に位置し、環状に近い構成を有する集落遺跡であった。その構造は、中央の平坦な面を空けて、長方形大型住居跡が南北二列に並ぶ配列であり、一時期には数軒程度がそれぞれの列に存在する。同時期の長方形大型住居跡を有する他の集落遺跡は、北上山地・三陸海岸部にて認められた。これらの集落遺跡は緩斜面部に位置し、遺構群が集まって分布する。長方形大型住居跡は、長軸方向を等高線と平行させるような形で分布しており、二列配置となるような構成は認められない。

綾織新田遺跡の集落構成は、単に南北二列の列状配置により構成されているようにも見受けられるが、最も大きな相違点は長方形大型住居跡の向きである。列状構成をそのまま導入するのであれば、等高線に沿うように緩斜面部に列状に配置すれば良いのであるが、綾織新田遺跡の長方形大型住居跡は、中央平坦面を避けて等高線と直行するように配置される。そして、中央平坦面を挟んで北と南のそれぞれに数軒ずつの長方形大型住居跡を形成する。この様な配置が大木4式期まで継続されることにより、放射状配置へとなる。

こうした長方形大型住居跡の配置関係からは、北と南列に分かれる二大群の分節構造を有しているという解釈がしやすい[谷口2005]。この谷口康浩氏の枠組みを用いて理解するならば、その背景には「血縁原理によって組織された出自集団」[谷口2005: pp.108]の存在が推定される。こうしたことの当否や具体的な内容については、他の遺構や遺物等を含めた分析が更に必要である⁽⁸⁾。

北上川流域では大木2b・3式期の長方形大型住居跡は存在せず、やや時期が下ってから長方形大型住居跡2類による環状集落遺跡が出現する。蟹沢館遺跡のあり方からすると、放射状の配置ではなく、明瞭な環状構成となるように見受けられる。そして、その竪穴住居跡の形態は、同時期の三陸沿岸部と北上山地内部のものとは大きく異なっている⁽⁹⁾。これらのことから、蟹沢館遺跡は、綾織新田遺跡とは別の脈絡で環状構成が形成されたものと考えられる。ただし、貯蔵穴を竪穴住居跡の近辺に配置するあり方からすると、その生活のあり方に関しては大きな差異が無かったものと推測する。

大木5a式期になると、環状集落の大清水上遺跡が登場する。この大清水上遺跡における竪穴住居跡には、従来の1類・2類の長方形大型住居跡が環状集落を構成し、さらに床に段を有する形態の長方形大型住居跡が環状集落より東側に位置している。前者は、これまでの検討から沿岸部・北上山地内部と北上川流域で確認され、後者は日本海側東北北部の円筒土器分布圏において認められる形態であると言える。

大清水上遺跡が立地する場所は、胆沢川沿いを伝い奥羽山脈から日本海側へと抜ける道沿いに位置している。そして、この場所は、秋田県東成瀬村から奥羽山脈を抜けて最初に開ける平坦な場所となる。このような別の地域へと抜ける出入口部には、大規模な集落遺跡が多いことを別稿にて指摘[菅野2008・2011]したが、大清水上遺跡はまさにそのような場所に位置していることになる。そして、この場所は日本海側の円筒土器分布圏の文化と接するのに適した場所であると考えられる。なお、鳩岡崎遺跡については不明な点が多いが、同様な観点からすると、和賀川流域と北上川流域との結節点に位置するものと解釈したい。

大清水上遺跡における大木6式期の居住の痕跡は貧弱である。この時期には、胆沢川流域の大清水上遺跡から和賀川流域の峠山牧場I遺跡の方に、日本海側との回廊的役割の主体が移ったことによるものと解釈したい。そして、この頃になると奥州市宝性寺跡遺跡[丸山ほか2004]、北上市煤孫遺跡[佐々木ほか1994]、滝ノ沢遺跡[稲野ほか1983・1993、杉本ほか1990、鈴木1993、小田嶋ほか2003、村木ほか2005、太田代2006]、横町遺跡[大渡2004、大渡ほか2008]など、中期まで続くような集落遺跡が数多く出現するようになる。こうした集落遺跡の動向のほか、貯蔵穴が密集する様相が顕著に見受けられることなどからも、それまでの生活の様相が大きく変化したものと考えられる。大木6式期における集落遺跡の変遷については、近年小林圭一氏による研究もあり[小林2017]、そのような研究を踏まえた上で今後の検討としたい。

本論で検討してきた長方形大型住居跡により構成される環状集落遺跡は、必ずしも相似する特徴を有しているわけではなく、むしろ遺跡ごとの個別的な特徴の方が目立つ。このことから、環状集落遺跡の形成要因の解明については、個々の遺跡のその他の遺構や遺物等の検討を踏まえ、遺跡・地域ごとの脈絡の上でその形成過程を検討する必要がある。また、中期中葉（大木 8a 式期）の環状集落遺跡である岩手県紫波町西田遺跡〔嶋ほか 1980〕では、中央部に土坑墓群、その周囲に掘立柱建物配置されるという様な「重帯構造」〔谷口 2005〕を見出すことができる。今回検討した前期の環状集落遺跡においては、そうした中期に認められる構造とは、異なる構造があったものと推察される。今後、本論の前後の時期、あるいは地域を広げて検討することにより、東北地方の環状集落の成立について把握できるものと考えている。

謝辞

本論を執筆するにあたり、早瀬亮介氏から多大なるご助言を頂いた。それから、山田康弘先生を初めとして基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」に参加されていた先生方からは、様々なご助言を頂いた。また、査読者には大変有益なご助言を頂いた。皆様に記して感謝申し上げたい。

註

(1)——綾織新田遺跡は、調査・報告時には新田Ⅱ遺跡として登録されていたが、国指定史跡時に綾織新田遺跡と改称された。その後新たに新田Ⅱ遺跡として隣接地が調査されている〔福島・晴山 2011, 北田 2014〕。後者との混同を避けるため、本論では綾織新田遺跡の名称を用いる。また、別稿〔菅野 2012〕で「ロングハウス状」の堅穴住居跡と記載していた住居跡は、本論では長方形大型住居跡と表記する。

(2)——前期の大型住居跡を検討した須原は、このような遺構に関しては「小形堅穴」という名称を用いて整理している〔須原 2007〕。

(3)——以前の検討〔菅野 2009〕では、総数 5 軒としていたが、G050a～d 堅穴住居跡を 1 軒と数えたためである。

(4)——小松Ⅰ遺跡の集落形態は、各時期の堅穴住居跡が等高線に沿って帯状に分布する。本文でも触れた 20 号住居跡などの長楕円形を呈する規模の大きな堅穴住居跡は、長軸を等高線方向に向けて分布する。小松Ⅰ遺跡の立地からすると地形的制約によるものとも考えられるが、環状集落構の成立を明らかにするために、早期から前期における集落遺跡の立地、集落構成、堅穴住居跡の形態について継続的に検討する必要がある。

(5)——上ノ山Ⅱ遺跡の長方形大型住居跡の配置関係は、綾織新田遺跡と同じ放射状の配列となる。ただし、等高線に並行する堅穴住居跡も多数認められる。報告書でも指

摘されている通り、数段階の変遷が考えられる〔大野ほか 1988, 山崎 1989〕。この集落遺跡の形成過程が、綾織新田遺跡と同様の理由によるものかどうかは不明である。

(6)——正式な報告書はまだ刊行されていないが、石巻市中沢遺跡ではこの頃の規模の大きな集落遺跡が確認されている〔石巻市教育委員会 2013〕。

(7)——大木 6 式に関しては、今村〔2010〕、小林〔2014・2016a・b〕らの研究を参考とする。大清水上遺跡 101・102 号住居跡出土の大木 6 式は、最初期の段階である 1 期に相当する。大木 6 式期の集落遺跡に関する詳細な検討は、別稿としたい。

(8)——綾織新田遺跡と上ノ山Ⅱ遺跡については、決状耳飾等の特徴的な石製品の生産遺跡である可能性が指摘されている〔佐藤 2004, 長田 2012・2013, 小林 2015 など〕。本論では堅穴住居跡の形態と配置関係のみから検討したが、このような特徴があることも含めて今後、総合的に検討する必要がある。

(9)——本文中で述べているように、蟹沢館遺跡の堅穴住居跡の形態は、北上山地内部における小松Ⅰ遺跡の早期の堅穴住居跡の系統であると考えている。そして、その後形成される館遺跡との関係を考えるならば、三陸沿岸部と北上川流域に挟まれた北上山地内における集落遺跡の動態については、今後の興味深い検討課題となる。

参考文献

- 相原康二ほか 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X V-1・X V-2』岩手県文化財調査報告書 70 岩手県教育委員会
- 天野順陽ほか 2003 『嘉倉貝塚 - 平成 13・14 年度重要遺跡範囲確認調査報告書 -』築館町文化財調査報告書 16 築館町教育委員会
- 浅田知世 1993 『蟹沢館遺跡発掘調査概報』北上市埋蔵文化財調査報告 14 北上市教育委員会阿部勝則 2000 『峠山牧場 I 遺跡 B 地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 320 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 阿部 豊 1999 『千鶏 IV 遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 54 宮古市教育委員会
- 石巻市教育委員会 2013 「石巻市中沢遺跡」『平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県教育委員会 pp.5-10
- 稲野裕介ほか 1983 『滝ノ沢遺跡 (1977 ~ 1982 年度調査)』北上市文化財調査報告 33 北上市教育委員会
- 稲野裕介ほか 1993 『滝ノ沢遺跡 (1984・86・87・88・90 年度調査)』北上市文化財調査報告 63 北上市教育委員会
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』同成社
- 岩田貴之 2004 『鳩岡崎上の台遺跡 (2002 年度)』北上市埋蔵文化財調査報告 62 北上考古学会
- 遠藤勝博ほか 2006 『雲南遺跡』陸前高田市文化財調査報告書 26 陸前高田市教育委員会
- 大田代一彦 2006 『滝ノ沢遺跡 VII (2005 年度)』北上市埋蔵文化財調査報告 77 北上市教育委員会
- 大野憲司ほか 1988 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 II』秋田県文化財調査報告書 166 集 秋田県教育委員会
- 大渡賢一 2004 『横町遺跡 (縄文時代図版編)』北上市埋蔵文化財調査報告 60 北上考古学会
- 大渡賢一ほか 2008 『横町遺跡 (縄文時代本文編)』北上市埋蔵文化財調査報告 90 北上考古学会
- 長田友也 2012 「石棒の製作と流通」『季刊考古学』119 (株)雄山閣 pp.79-84
- 長田友也 2013 「前期石剣とその周辺」『考古学ジャーナル』637 ニューサイエンス社 pp.7-10
- 小田嶋知世 1998 『成沢 II 遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告 32 北上市教育委員会
- 小田嶋知世ほか 2003 『滝ノ沢遺跡 VI (2001・2002 年度調査)』北上市埋蔵文化財調査報告 56 北上市教育委員会
- 小原正治・鈴木明美 1985 『大清水上遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財報告書 15 胆沢町教育委員会
- 金子昭彦 2002 『新田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 405 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 菅野智則 2008 「北上川流域の縄文社会 - 立地と分布からみた集落の変化 -」『東北縄文社会の歴史動態的研究 - 河川流域における縄文集落の考古学的研究 -』東北芸術工科大学東北文化研究センター pp.29-48
- 菅野智則 2009 居住形態からみた東北地方の縄文前期『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』日本考古学協会 2009 年度山形大会実行委員会 pp.155-164
- 菅野智則 2011 「北上川流域の縄文集落遺跡」『季刊東北学』26 柏書房 pp.84-101
- 菅野智則 2012 「北上川中流域における縄文時代中期集落に関する基礎的研究」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』I 東北芸術工科大学東北文化研究センター pp.107-123
- 菅野智則 2015 「東北縄文集落の姿」『北の原始時代』東北の古代史 1 吉川弘文館 pp.100-132
- 神原雄一郎 2008 『薬師社脇遺跡 - 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書』宮城開発株式会社
- 北田 勲 2014 『新田 II 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 622 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 北田 勲ほか 2004 『館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 432 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 興野義一 1970 「大木 5b 式の提唱 - 宮城県長者原遺跡出土資料による -」『古代文化』22-4 pp.97-102
- 草間俊一ほか 1963 『胆沢村宮沢原・大清水上遺跡』胆沢村教育委員会
- 小林圭一 2014 「吹浦遺跡出土の縄文土器」『研究紀要』13 東北芸術工科大学東北文化研究センター p.8
- 小林圭一 2015 「山形県内出土の玦状耳飾について」『研究紀要』7 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター pp.1-22
- 小林圭一 2016a 「会津地方の大木 6 式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要』15 東北芸術工科大学東北文化研究センター pp.25-77
- 小林圭一 2016b 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木 6 式土器」『研究紀要』8 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター pp.21-50

-
- 小林圭一 2017 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡の集落構成について」『研究紀要』9 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター pp.19-44
- 小林圭一・菅原哲文 2009 「押出遺跡と最上川流域の縄文前期集落遺跡」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』日本考古学協会 2009 年度山形大会実行委員会 pp.165-201
- 小林 克・小島朋夏 2001 「非環状集落」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会 pp.73-78
- 小向裕明・佐藤浩彦 2002 『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書 13 遠野市教育委員会
- 小山内透 1996 『鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 240 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 坂口 隆 2003 『縄文時代貯蔵穴の研究』株式会社アム・プロモーション
- 佐々木嘉直ほか 1994 『煤孫遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 196 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木清文ほか 2000 『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 318 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤庄一ほか 1990 『押出遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会
- 佐藤淳一・中村絵美 2006 『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 475 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤浩彦 2004 「北日本最大の滑石攻玉遺跡」『季刊考古学』89 (株)雄山閣 pp.65-66
- 佐藤憲幸・三好秀樹 2003 『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書 192 宮城県教育委員会
- 嶋 千秋ほか 1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ(西田遺跡)』岩手県文化財調査報告書 51 岩手県教育委員会
- 庄司 敦 1987 『菅谷六田遺跡』利府町文化財調査報告書 3 利府町教育委員会
- 新海和広 2011 「秋田県の大形住居」『北日本縄文時代大型住居集成』北日本縄文文化研究会
- 杉本 良ほか 1995 『南部工業団地内遺跡Ⅰ』北上市埋蔵文化財調査報告 9 北上市立埋蔵文化財センター
- 杉本 良ほか 1990 『滝ノ沢遺跡Ⅱ(1989年度調査)』北上市文化財調査報告 60 北上市教育委員会
- 鈴木明美 1993 『滝ノ沢遺跡Ⅳ(1992年度)』北上市埋蔵文化財調査報告 11 北上市教育委員会
- 鈴木克彦 2011 「縄文文化の大形住居跡の研究概説」『北日本縄文時代大型住居集成』北日本縄文文化研究会 pp.1-26
- 須原 拓 2007 「縄文時代前期の大形住居について - 大木式土器文化圏の事例を中心に -」『紀要』X X VI (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.25-42
- 瀬川司男ほか 1980 『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)』岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書 12 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文明 1982 『江釣子遺跡群 - 昭和 56 年度発掘調査報告 -』江釣子村教育委員会
- 高橋文明 1983 『江釣子遺跡群 - 昭和 57 年度発掘調査報告(鳩岡崎上の台遺跡・蔵屋敷遺跡) -』江釣子村教育委員会
- 高橋文明 2001 『鳩岡崎上の台遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告 46 北上市立埋蔵文化財センター
- 高橋文夫ほか 1981 『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅱ)』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 20 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 千葉直樹 2007 「宮城県における縄文時代前期後葉の土器に関する一考察」『考古学談叢』六一書房 pp.183-211
- 永瀬福男ほか 1981 『杉沢台・竹生遺跡』秋田県文化財調査報告書 83 秋田県埋蔵文化財振興会
- 中村絵美 2004 『大中田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 429 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福島正和・晴山雅光 2011 『新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 572 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福島正和・羽柴直人 2012 『山脈地遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 598 公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 朴沢志津江・早田 勉 2008 『大清水上遺跡発掘調査報告書』奥州市埋蔵文化財調査報告書 3 集 奥州市教育委員会
- 星 雅之 2006 「円筒式土器と大木式土器の境界を探って」『紀要 X X V』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.1-22
- 星 雅之 2008 『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 510 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
-

-
- 星 雅之・須原 拓 2004 「岩手県内の発掘調査事例からみた十和田中環テフラ」『紀要』X X III (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.1-22
- 星 雅之・前田 稔 2000 『沢田 I 遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 342 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 丸山浩治ほか 2004 『宝性寺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 441 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三浦圭介ほか 1991 『中野平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 134 青森県教育委員会 三浦謙一ほか 1984 『長者屋敷遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』岩手県埋蔵文化財調査報告書 77 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 三浦謙一・佐々木勝 1985 「縄文時代前・中期の住居社群の変遷 - 松尾村長者屋敷遺跡の分析 -」『紀要』V 岩手県埋蔵文化財センター pp.1-48
- 村上 拓・佐々木務 1994 『牧田貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 241 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村木 敬 2005 『滝の沢地区遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 456 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 山崎和男・播摩芳紀 2006 『杉沢台遺跡』能代市埋蔵文化財調査報告書 17 能代市教育委員会
- 山崎文幸 1989 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ(補遺)』秋田県文化財調査報告書 186 集 秋田県教育委員会
- 吉田 充 2004 『小松 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 433 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(東北大学埋蔵文化財調査室, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017 年 3 月 17 日受付, 2017 年 7 月 31 日審査終了)

A Study of Circular Settlements of the Early Jomon Period in the Kitakami River Basin

KANNO Tomonori

This paper examines the characteristics of circular settlements of the Early Jomon period, consisting of large rectangular dwellings, in the Kitakami River Basin. Large rectangular dwelling remains were generally arranged in lines in the ruins of the first half of the Early Jomon period in the Sanriku Coast and Kitakami Mountain region. In sharp contrast, such dwellings were arranged in a radial manner at the Ayaori Shinden Site. Moreover, those at the Ganjadate Site in the Kitakami River Basin were built in a different style and arranged in a perfect circle. In light of these findings, this paper describes regional variations in the style and arrangement of large rectangular dwelling remains from the first half of the Early Jomon period in the Sanriku Coast and Kitakami Mountain area and the Kitakami River Basin, and explains the unique characteristics of the Ayaori Shinden Site. The Osuzukami Site, large-scale circular settlement ruins from the latter half of the Early Jomon period, includes dwelling remains that show characteristics typically associated with the northern Tohoku region on the Japan Sea side. Located on an important route passing through the Ou Mountain Range, the Osuzukami Site is assumed to have had a close relationship with the Japan Sea side region.

Key words: Early Jomon period, large rectangular dwelling remains, circular settlement, Tohoku region

付表 長方形大型住居跡等計測値

遺跡名	住居跡名	時期(土器型式)	面積	完形率	長軸	短軸	長軸/短軸	図
綾織新田	1号竪穴住居跡①	大木3式	25.4	65.3	8.2	3.5	2.4	
綾織新田	1号竪穴住居跡②	大木3式	36.3	80.7	9.9	4.2	2.4	
綾織新田	3号竪穴住居跡①	大木2b式~大木4式	26.4	88.0	8.6	3.5	2.5	第3図①
綾織新田	3号竪穴住居跡②	大木2b式~大木4式	40.9	87.5	10.1	4.5	2.2	
綾織新田	3号竪穴住居跡③	大木2b式~大木4式	49.6	100	10.9	4.8	2.3	
綾織新田	3号竪穴住居跡④	大木2b式~大木4式	54.3	96.2	11.3	5.4	2.1	
綾織新田	4号竪穴住居跡	大木3式~大木4式	15.6	71.4	6.2	2.9	2.2	
綾織新田	5号竪穴住居跡②	大木3式~大木4式	56.3	48.4	12.8	4.9	2.6	
綾織新田	5号竪穴住居跡①	大木3式~大木4式	38.8	51.0	10.1	4.2	2.4	
綾織新田	8号竪穴住居跡	大木4式	31.6	95.7	9.0	3.7	2.5	
綾織新田	9号竪穴住居跡	大木4式	50.5	98.1	12.9	3.9	3.3	第3図②
綾織新田	10号竪穴住居跡①	大木4式	46.6	91.3	12.3	4.0	3.1	
綾織新田	10号竪穴住居跡②	大木4式	52.8	88.3	12.3	4.6	2.7	
綾織新田	11号竪穴住居跡	大木3式~大木4式	35.7	69.7	9.2	4.3	2.2	
綾織新田	12号竪穴住居跡	大木2b式	24.9	67.0	6.8	3.6	1.9	第3図③
綾織新田	14号竪穴住居跡	大木2b式	9.2	95.4	3.7	2.6	1.4	第3図④
沢田 I	RA116住居跡1期	大木2b式	23.7	61.1	7.9	3.1	2.5	第5図①
沢田 I	RA116住居跡2期	大木2b式	43.2	64.7	14.1	3.2	4.4	
沢田 I	RA116住居跡3期	大木2b式	61.6	91.4	16.6	3.9	4.3	
沢田 I	RA116住居跡4期	大木2b式	82.6	100	19.7	4.6	4.3	
沢田 I	RA201住居跡	大木2b式	48.4	75.0	12.9	4.2	3.1	第5図②
沢田 I	RA202住居跡	大木2b式	83.4	69.3	18.5	5.0	3.7	
千鶴IV	D-7号竪穴住居跡	大木4式	39.8	79.3	10.2	4.3	2.4	
館	SI18竪穴住居跡	大木4式	52.3	61.6	12.3	4.5	2.7	第6図②
館	SI23竪穴住居跡	大木2a式~大木4式	48.9	53.3	12.9	4.6	2.8	
館	SI24竪穴住居跡	大木2a式~大木4式	39.1	43.8	11.0	3.7	3.0	
館	SI27竪穴住居跡	大木4式	55.2	72.3	15.8	4.6	3.5	第6図③
蟹沢館	SI011竪穴住居跡	大木3式	43.9	100	14.1	3.1	4.5	第7図②
蟹沢館	SI014竪穴住居跡	詳細時期不明	36.8	68.2	8.6	4.9	1.8	第7図③
南部工業団地内	C004竪穴住居跡	大木2b式	6.9	86.0	3.2	2.6	1.2	
南部工業団地内	C007竪穴住居跡	大木2b式	7.4	100	3.1	2.5	1.2	
南部工業団地内	D038竪穴住居跡	大木2a式	6.9	49.1	3.4	2.6	1.3	
南部工業団地内	G004竪穴住居跡	大木3式	23.6	81.7	6.9	4.0	1.7	第9図②
南部工業団地内	G025竪穴住居跡	大木3式	13.4	100	5.0	3.2	1.5	
南部工業団地内	G050a竪穴住居跡	大木3式	28.6	85.3	8.2	4.1	2.0	第9図①
南部工業団地内	G050b竪穴住居跡	大木3式	7.3	66.9	3.6	2.3	1.6	
南部工業団地内	G051竪穴住居跡	大木3式	22.4	82.6	7.2	4.2	1.7	
上ノ山II	SI016竪穴住居跡	大木4式~大木5a式期	6.9	100	2.5	2.7	1.1	第11図④
上ノ山II	SI180竪穴住居跡	大木4式~大木5a式期	99.5	40.3	5.7	18.6	3.3	第11図②
上ノ山II	SI326竪穴住居跡	大木4式~大木5a式期	62.8	34.5	5.6	12.9	2.3	第11図③
大清水上	101号住居跡	大木6式	99.8	62.3	18.1	6.6	2.8	第13図①
大清水上	102号住居跡	大木6式	52.2	66.6	11.8	5.9	2.0	
大清水上	201号住居跡	大木5a式	64.4	74.8	17.2	4.6	3.7	第13図②
大清水上	202号住居跡	大木5b式	72.9	68.8	19.5	3.3	5.8	
大清水上	203号住居跡	大木5b式	37.8	67.7	9.2	5.0	1.8	
大清水上	205号住居跡	大木5a式	67.5	72.9	15.9	5.3	3.0	第13図③
大清水上	208号住居跡	大木5a式	22.5	78.6	7.2	4.4	1.6	
大清水上	209号住居跡	大木5b式期以前	9.3	100	-	-	-	
大清水上	210号住居跡	大木5a式~大木5b式?	13.4	96.6	-	-	-	
大清水上	301号住居跡	大木5a式	52.4	92.6	12.4	5.5	2.3	
大清水上	302号住居跡	大木5a式	38.4	95.0	9.4	5.2	1.8	第13図④
大清水上	303号住居跡	大木5a式	55.8	92.5	11.5	6.1	1.9	
大清水上	304号住居跡c	大木5a式	22.3	94.2	-	-	-	
大清水上	305号住居跡b	大木5a式	44.1	89.9	10.7	4.8	2.2	
大清水上	305号住居跡c	大木5a式	50.2	65.8	11.3	5.0	2.2	
大清水上	307号住居跡	大木5a式	11.8	97.6	-	-	-	第13図⑤
大清水上	308号住居跡	大木5a式	6.1	100	-	-	-	
大清水上	401号住居跡	大木5a式	57.3	74.0	12.5	5.3	2.4	
大清水上	404号住居跡	大木5a式	31.8	78.8	8.3	6.0	1.4	
大清水上	409号住居跡	大木5a式	6.2	100	-	-	-	
大清水上	411号住居跡	大木5a式	7.4	34.8	-	-	-	第13図⑥
大清水上	412号住居跡	大木5a式	26.2	95.2	7.4	4.9	1.5	
大清水上	416号住居跡	大木5a式	32.4	89.7	8.5	5.1	1.7	
大清水上	421号住居跡a・b	大木5a式	56.9	94.6	11.8	5.5	2.1	
大清水上	423号住居跡	大木5a式~大木5b式	9.3	86.8	-	-	-	
大清水上	424号住居跡	大木5a式~大木5b式	9.2	73.4	-	-	-	
大清水上	425号住居跡	詳細時期不明	6.1	100	-	-	-	
大清水上	426号住居跡	大木5a式期以後	5.1	88.4	-	-	-	
大清水上	427号住居跡b	大木5a式	61.5	62.4	11.4	6.4	1.8	
大清水上	427号住居跡c	大木5a式	45.5	49.6	11.1	4.4	2.5	
大清水上	428号住居跡	大木5b式	34.8	70.5	9.5	4.7	2.0	
大清水上	429号住居跡	大木5b式	37.8	100	11.6	4.2	2.8	
大清水上	432号住居跡	大木5a式	8.4	100	-	-	-	
大清水上	505号住居跡	大木5a式	20.0	100	-	-	-	第13図⑦
大清水上	507号住居跡	詳細時期不明	8.0	53.5	-	-	-	
大清水上	1号竪穴棟遺構(Bi18)	大木6式?	2.3	100	1.9	1.3	1.5	
大清水上	第1号住居跡(Ci315)	大木6式	11.1	85.3	-	-	-	
大清水上	第2号住居跡(Bj27)	大木5a式?	34.2	100	8.8	4.5	1.9	
大清水上	第3号住居跡(Cb30)	詳細時期不明	7.8	100	3.7	2.8	1.3	
大清水上	第4号住居跡(Cb27)	大木5a式?	15.7	100	6.1	3.1	1.9	
大清水上	第5号住居跡(Cd18)	大木6式	18.7	100	-	-	-	
大清水上	第6号住居跡(Cd15)	大木6式	16.0	69.4	-	-	-	
杉沢台	SI06竪穴住居跡	円筒下層d式	81.6	96.5	15.9	6.3	2.5	第14図①
杉沢台	SI07竪穴住居跡	円筒下層d式	216.4	83.5	30.6	8.4	3.6	第14図③
杉沢台	SI45竪穴住居跡	円筒下層d式	51.0	95.8	9.1	6.9	1.3	第14図②
峠山牧場 I	RA13住居跡	大木6式	24.3	73.4	-	-	-	第15図③
峠山牧場 I	RA14住居跡	大木5b式	11.1	100	-	-	-	第15図④
峠山牧場 I	RA15住居跡	大木6式	39.7	69.6	-	-	-	
鳩岡崎	SI13竪穴住居跡	大木5a式	153.7	26.7	24.3	6.4	3.8	第16図④

*本表の遺跡の並び順は、本文で触れている順番となっている。